

信徒使徒職ブックレット

わたしの物語を 分かちあうために

あなたにもできるイエスさまのお手伝い



日本聖公会訓練計画委員会 編

発刊にあたって

日本聖公会訓練計画委員会は、1995年10月13日～15日に日野市ラ・サール研修所を会場に第1期第1回「信徒使徒職のためのリーダーシップ・トレーニング ～牧会型の教会から宣教型の教会へ～」を開催しました。そして現在(2000年3月31日)までに4期計8回のトレーニングを行い、計90名(内スタッフ15名)の方々が参加されました。

私たちは、第1期第2回トレーニングが終わった後より、参加者の皆さんに実際に行ったセミナーの概要報告を配布してきました。というのは、今までこの種のトレーニングではその良さが参加した者にしか分からず、全管区的な動きになりにくかったのではないかと考えたからです。これはトレーニングするスタッフ側に専門性が求められ、常にトレーニングする側とされる側、教役者⇔信徒という図式が、変わることなくあったためではないかと思っています。

私たちはその反省に基き、この方法論(考え方)による教会形成がより多くの場で理解され、実施するための手引書が必要であると考えました。誰でもスタッフ・ロール(このトレーニングでは“ファシリテーター<引き出し役>”と呼んでいます。)を取ることができる手引書、一特別な技能・専門性をほとんど必要とせず、プログラムを実施する過程の中でスタッフとして成長していけるもの—があれば、各個教会でも実施可能になるのではないのでしょうか。

私たちはこの小さな手引書が、日本聖公会の各教区・各教会で有効に用いられ、私たち一人ひとりが、それぞれの遣わされた場で「使徒職・奉仕職」として整えられ、神様の祝福のうちにその働きをしていくことができますよう願っています。

日本聖公会訓練計画委員会

目 次

発刊にあたって

「信徒使徒職リーダーシップ・トレーニング」実施の背景	
1994年主教会見解	4
全員奉仕職	5
信徒使徒職	7
「信徒使徒職リーダーシップ・トレーニング」を始める前に	
訓練・養成のための視点	10
ファシリテーター	12
二つの教育方法	12
学び合いを可能にする「ファシリテーター」	14
「信徒使徒職リーダーシップ・トレーニング」の実際	17
第1回プログラム	18
§ 仲間づくり・グループづくり	19
§ ファシリテーターとは	25
§ 小グループに分かれてのワークショップ 1	36
ミニ・レクチャー（ミッシオ・ディについて）	39
もっと詳しく知りたい方のために	41
§ 小グループに分かれてのワークショップ 2	47
§ 今の私にできること、したいこと	49
全体のふりかえり	51
第2回プログラム	52
オリエンテーション	53
§ 聖書研究のもう一つのあり方 ～バイブルシェアリングとは～	55
§ 実際にやってみよう	70

§	ワークショップ～自分たちで作るバイブルシェアリング	78
§	作成したアイデア、計画の共有	
	参加者が開発したバイブル・シェアリング	79
§	全体のふりかえりとまとめ	85

礼拝・祈りについて

開 会 礼 拝	88
朝 の 祈 り (Ⅰ)	94
朝 の 祈 り (Ⅱ)	96
就寝前の祈り (Ⅰ)	98
就寝前の祈り (Ⅱ)	99
就寝前の祈り (Ⅲ)	102
閉 会 聖 餐 式	104

参 考 資 料

1. 何のための教育か?	106
2. パウロ・フレイレの教育思想と実践から学ぶ	111
3. アウグスト・ボアールの民衆演劇の思想と実践から学ぶ	119
4. 現実社会に向き合う「教会」へ……	130
5. イエスは聖書のテキストといかに対話したか	135
6. 土 曜 黙 想 ～1週間の聖書の思い巡らし～	142

あとがき

「信徒使徒職リーダーシップ・トレーニング」実施の背景

1994年主教会見解

私たちがこのトレーニングを計画し、実施することになったきっかけは、1994年2月23日付で公表された『日本聖公会の現状および将来に対する主教会の見解（以下「主教会見解」と言います。）』でした。『主教会見解』5頁～6頁で、主教会は以下の提案をしておられるので、その要旨をもう一度みてみたいと思います。

1 「全員奉仕職（total ministry）の神学」の確立

入信の式282頁に「キリストの祭司職にあずかる者」となると言われているように、全てのキリスト者は、キリストの体に接される洗礼によって、神のミッションの協働者として召されているのであり、聖職と信徒はその同じミッションの中での役割の相違であって、上下関係ではない。……一方的に教え、導き、保護する人という従来の方師像と、その裏腹になっているところの、一方的に聞き、従い、保護される人という従来の信徒像は根本的に批判されなければならない。「全員奉仕職の神学」の確立こそが、……聖職中心主義と、信徒の「教会のお客様」的依存体質を脱却できる理論的根拠であり…

2 信徒の訓練・養成

……信徒一人一人の教会内外の働きが尊重され、共同体の働きとして認証され、職務が与えられる時にこそ、それぞれの主体性が育てられ、信徒使徒職が確立して行くであろう。…

この「主教会見解」の中で、「**全員奉仕職**」とか「**信徒使徒職**」という耳慣れぬ言葉が用いられています。最初にこれらの言葉の意味について、少しだけご説明したいと思います。

全員奉仕職 (total ministry)

この言葉は聖公会では、1988年ランベス会議の決議第45号でおそらく初めて用いられた奉仕職の理解だと思えます。この会議では以下のように決議しています。

4 5 全教会の宣教と奉仕職

本会議は、

- 1 神が聖霊を通して、洗礼を受けたすべての者の全員奉仕職 (total ministry) という意味での革命をもたらそうとしておられることを是認し、かくして教会を富ませ、男女に世界の希望としてのキリストを知られめておられることに鑑み、
- 2 各主教が自分の教区内で、この奉仕職を分かち合う形態が現実となることを確実にするために、機会と訓練と支援を提供するよう必要な手段を講じることを要望するものである。

この決議の前提は、同会議の「宣教と奉仕職部会報告」の内、特に70～75節、87～105節によっていると考えられます。これらの中から、私たちの課題に深く関わる個所を引用してみましょう。

世界と教会における信徒の奉仕職

- 87 キリストに始まるただ一つの宣教、ただ一つの奉仕の業がある。
……我々が達した共通の関心は、将来における教会の宣教と維持は、信徒の執る中心的な役割へ根源的に関わって行くという決断にかかっている。
- 88 「信徒」という言葉は、教会の構成員である教会の老若男女すべてを指すと理解される。この定義は、叙任奉仕職の三職位をも含むのであって、叙任奉仕職は、地域教会に対して、それがより広いキリスト者の家族の一員であることの徴として存在すると共に、主として、他の者たちが神から彼らに与えられている奉仕の業を行うことができ

るように招くことによって、教会に仕えるために神から召されているのである。

神の民すべてへの宣教と奉仕の業の権能付与

91 よみがえられたキリストは言われる、

「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。……聖霊を受けなさい。」(ヨハネ20:21、22)。

イエス・キリストにおいて、神が先導発端をつくられたことが、神の民(laos)全体の宣教と奉仕の業の源泉である。神は我々をご自分の宣教と奉仕の業に参与するよう、慈しみ深く召されるのである。**すべての者が**召されるのであって、民(laos)には男も女も、若い者も年若い者も、叙任された者も、「信徒」と呼ばれる者も含まれているのである。

信徒奉仕職の神学

洗礼と奉仕職

95 「もしあなたが洗礼を受けたキリスト者であるなら、あなたはすでに奉仕者である。叙任されているか、いないかは問題にならない。あなたがどのように反応しようとも、この表明に間違いはない。…

96 アングリカン・コミュニオンは激しくて影響の大きい変革の中に捕らえられているが、これを通して我々は、旧来の伝統的な信徒奉仕職と叙任奉仕職の区別がなくなり、新しい総合的奉仕職の概念が発展しつつあるのを見出している。
(決議第45号参照)

この報告が強調している点は、以下の3点ではないでしょうか。

1. 父と子と聖霊のみ名によって洗礼を施された者は、叙任されていなくても「信徒」であって、神の宣教と奉仕の業に参与するよう等しく召し出されている。(91、95節)
2. 従来¹⁾の聖職・信徒職という区別で考えるのではなく、新しい総合的奉仕職(全員奉仕職)に召し出された同労者である。(96節)

3. 叙任奉仕職（聖職）に召された者の特別な任務は、「教えること」「聖徒たちをととのえて奉仕の業をさせ」ること（71、88節）、また「地域の教会が、世界に広がる聖なる公会の一員であることの徴、キリストにあって一致の徴」（88節）であること。
- かねてより「聖職・信徒が協働して」という表現がありましたが、このことをスローガンで終らせず、実際に行っていくことが**全員奉仕職として召された者の任務**だと言えるでしょう。

信徒使徒職

「使徒」という言葉のもともとの意味は、「派遣された者」「使者」「全権を委託された者」です。これは「神の福音宣教のために派遣された者」という意味でもあります。その意味で使徒職の任務は、神の民として召し出された、すべてのキリスト者に与えられたものだということができます。

「信徒使徒職」という言葉は、第2バチカン公会議（1962～1965年）で発布された『信徒使徒職教令』にはじめて現れました。この教令の基礎は、同会議『教会憲章』31条（信徒の定義）にあります。すなわち信徒とは、「洗礼によってキリストに合体され、神の民に加えられ、自分たちの様式においてキリストの祭司職・預言職・王職に参与するものとなり、教会と世界の中で自己の本分に応じて、キリストを信じる民全体の使命を果たすキリスト者のことである。」のです。従来、司祭職にも修道者にも召されなかった一般信徒という消極的立場、教会の掟を「守っている信者⇔守らない信者」、「教える教会⇔教えられる教会」、「命じる教会⇔従う教会」といった区別から生じる信徒の消極性を支持するのではなく、神の民のうちにおける信徒の積極性を打ち出したのです。このことについて『教会憲章』33条（信徒の使徒職）は、「すべての人は洗礼と堅信を通して主

自身からこの使徒職に任命される。……信徒によらなければ教会が地の塩となることができな場所と環境において、教会を存在させ活動的なものとするのが、特に信徒に与えられた使命である。このようにすべての信徒は、自分に与えられたたまもの自身によって、「キリストのたまもの量に応じて(エフェソ4・7)」教会自身の宣教の証人であると同時に生きた道具である。」と考えられるようになりました。

この結果、『信徒使徒職教令』2条(教会の使命への参加)は、「父なる神の栄光のために、キリストの王国を全地に広めて、すべての人をあがないによる救いにあずからせ、その人々を通して全世界を実際にキリストへと秩序づけるために、教会が立てられたのである。この目的に向けられた神秘体の活動はすべて「使徒職」と呼ばれる……キリスト者としての召し出しは、その本性上、使徒職への召し出しである。……キリストの司祭職・預言職・王職にあずかる者となった信徒もまた、教会と世間において、神の民全体における自分の役割を果たすのである。信徒は福音の宣布や人々の聖化に尽くすとき、また福音の精神を世間に浸透させ、その秩序を完成するよう働くとき、使徒職を行う。」という結論を導き出したのです。

この点について、1988年ランベス会議「宣教と奉仕職部会報告」の74節は同じ趣旨の報告をしています。

74 ……今日、ある西欧の教会で福音伝道が沈滞しているように思われる理由の一部は、奉仕の業について、従来から聖職の働きを抜き出して強調することが行き亘っていたことの中にあるに違いない。ところが実のところ、「第一線」で生きているのは、信徒のキリスト者なのであって、非キリスト者の職場仲間や隣人や友人と最もたやすく混じり合えるし、神の下での次年度の求道者や改宗者となるかもしれない教会の「周辺の接触」を広げうるのである。(同報告書49頁)

ランベス会議で言われている「全員奉仕職」にせよ、第2バチカン公会議で言われている「信徒使徒職」にせよ、そのいずれもが洗礼によってキリスト者に召し出された者の奉仕の務め（ミニストリー）の重要性について述べています。この奉仕の務めは、「神の宣教と奉仕の業に参加する」ことでありましょう。では、私たちはどのようにして、この奉仕の務めに参与すればよいのでしょうか。

さまざまな取り組み方があると思いますが、私たちは、『主教会見解』が示唆している「全員奉仕職、信徒使徒職」と呼ばれる働き（ミニストリー）を日本聖公会の中で現実のものとしていくために協議を重ね、池住義憲兄と西原廉太司祭（いずれも中部教区）の協力を得て、トレーニング・プログラムを立案し、実施してきました。たくさんあるものの内の一つではありますが、この小さな冊子を通して皆さんにご紹介したいと思います。

「信徒使徒職リーダーシップ・トレーニング」を始める前に

このプログラムは、方法論的にはブラジルの教育学者パウロ・フレイレが提唱し実践した「参加者中心・参加者主体の研修方法論（開発教育・問題提起型教育）」を用いています。このプログラムでは、参加者がお互いの対話をとおして各々の意見を引き出し、自分の賜物・生き方を発見できるように援助しあうことによって、問題解決に向けての道を探り、委ねられた使命を発掘して実施していく者とされることが期待されています。すなわち指導する人・される人という関係に立った働きでなく、各々の賜物を活かしつつ、共に使命のために仕える者とされることが目指しているのです。その意味において、この方法論・考え方は、『主教会見解』で述べられている「全員奉仕職の神学の確立」、「信徒の訓練・養成」という課題に対して、応えることのできるものと思います。

訓練・養成のための視点

エフェソの信徒への手紙の著者は次のように述べています。

「私たち一人一人に、キリストの賜物のはかりに従って、恵みが与えられています。……こうして、聖なる者たちは奉仕の業に適した者とされ、キリストの体を造り上げてゆき、……」（4：7，12）

「キリストの賜物のはかりに従って、恵みが与えられ」た私たちが、「奉仕の業に適した者とされ」るためには、何らかの形で訓練され、養成されなければなりません。訓練するとか養成するというと、随分と偉そうに聞こえますが、「訓練・養成する⇔される」という関係ではなく、共に神さまによって育てられるのです。

そのために、私たちは現在用いられている教育とか開発とかいう言葉を、別の視点から見てみたいと思います。

教 育 (Education)

この言葉は E と duca という二つのラテン語からできています。E は ex (外へ) という意味で、duca は ducare (私が引き出す、導き出す) という意味です。そこには教えるという言葉は入っていません。この言葉を日本語訳するとき、教育としてしまったところに誤りがあったのではないのでしょうか。ある学者は、これを「耕地」、あるいは「大地」と訳していれば、本来的な ex-ducare ができたのではないかと、言っておられました。つまり、私たちが普通に「教育」といっていることは、自分の、あるいは誰かの持っている賜物を「外へ引き出す、導き出す」という意味なのです。

開 発 (Development)

語源は envelop (封筒) という意味。人間は豊かな賜物を持っています。これを封してしまう状態を envelop と言います。

封をするときに 2 種類あるのではないのでしょうか。一つは自分で自分の持っている豊かなものに封をしてしまう。遠慮とか謙譲ですね。もう一つは、社会が封をしてしまう。抑圧とか差別がこれにあたるでしょう。豊かなものを持っているけれども、これを自分で封をしてしまう。豊かなものを持っているけれども、社会がこれを封してしまう。(女のくせに、若いくせに)

どうしたら良いのでしょうか。そうです、封を開ければよいのです。そこで envelop の反対は、英語では de を付け加えて、develop となります。日本語で「開発」というと、何となく環境問題など無視した「大規模開発」などという、あまり良いイメージがないかも知れません。けれども、その本来の意味は「抑圧されているものを解放する、自由にする」ということなのです。

信徒使徒職のトレーニングは、教会の中でこんな教育のあり方、私たちに与えられている賜物の開発のあり方を目指しています。そしてこのような教育・開発のためにお手伝いする人、賜物の引き出し役をする人を、私たちは「ファシリテーター」と呼んでいます。

トレーニングの実際に入る前に、この「ファシリテーター」という役割について考えてみたいと思います。

ファシリテーター

キリストから委ねられた福音宣教の奉仕の務めを果たすために、私たちがふさわしい者とされていくには、「ファシリテートする」「引き出し役になる」ということが大切になってきます。これはある特定の人の役割ではなく、奉仕の務めに召し出されているすべてのキリスト者に求められている役割であるように思います。

では、引き出し役としてのファシリテーターとは、どのような働きをする必要があるのでしょうか。前の頁でふれた「教育」とか「開発」ということを頭の片隅に置いてお読みください。

二つの教育方法

教育方法は、大きく二つに分けられます。

「情報伝達型」と「問題提起型」です。

情報伝達型教育では、先生は、生徒が何も持っていないことを前提に、ただ一方的に生徒に伝達します。伝達する内容（カリキュラム）は先生が決め、準備します。多くの場合、生徒の意見を求めたりせず、知識を詰め込みます。これを「権威の教育」または「飼育の教育」と呼びます。

それに対して、問題提起型教育は大きく異なります。先生は、生徒一人ひとり、それぞれ異なった豊かな経験、知識、技術、アイデ

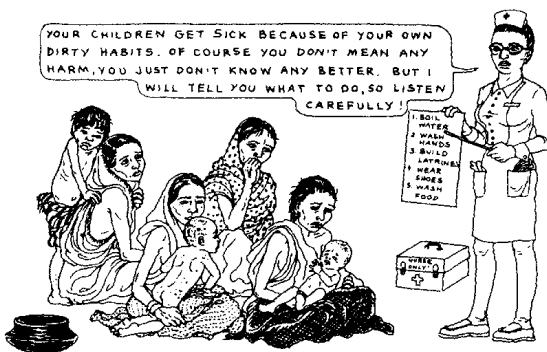
ア、関心、パワーを持っている、と信じています。先生の役割は「質問する」こと、生徒の考えや声を「聴く」ことです。それによって生徒が持っている豊かなものを「引き出す」ことです。そしてグループの中で「対話を起こし」、そのプロセスで、先生の持っている経験や知識を生徒のものとは組み合わせながら、「一緒に考え合う」ことです。何が問題なのか、なぜそうなのか、どうしたらよいかなどを……。問題を発掘、発見するのは生徒です。自分たちの経験に照らして。先生はこれを側面から支え、可能にする役割を担います。

先生は、生徒との、および生徒間での対話を通じた相互学び合い、強め合いをより可能に、より意味のあるものにするため、いろいろ工夫します。たとえば、問題提起のきっかけとして簡単な絵（イラスト）、写真、ポスター、ゲームやエクササイズ、クイズ、スライド、ビデオ、詩、物語、文字や言葉などを用いた体験学習などです。

こうした教育を「参加型学習」とも言います。これを「変革の教育」、「解放の教育」と呼びます。

この二つの教育方法を絵で表わすと、次のようになります。

下の絵－1は、情報伝達型（知識詰め込み型）です。



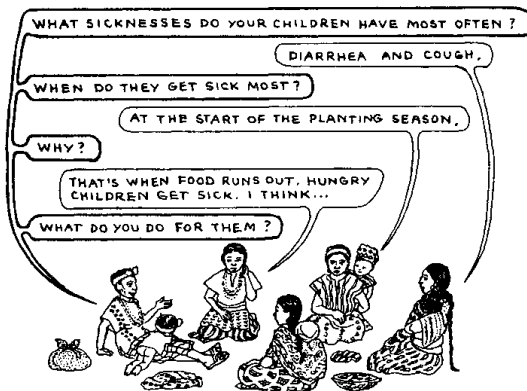
看護婦（先生）は、村の母親（生徒）に、「あなたたちの子どもは、きたない生活習慣のために病気になっています。この先どうなるか、どうしたら良くなるか、知らないでしょう。私が話してあげます。注意して聞き

絵－1

なさい！」と言っています。手に持っているポスターには、「①水を沸騰させる、②手を洗う、③便所をつくる、④足を洗う、⑤食物を洗う」と書いてあります。

さて、母親たちの表情は……？

絵-2は問題提起型です。



絵-2

一番左側に座っている男の人が、「みんなの子どもは、どんな病気が最も多いの？」と尋ねます。すると、「下痢と咳だね。」「どんな時に、よく病気になるんだい？」「そうねエ、田植えのはじまりの頃かし

ら。」「どうして？」「だってその頃、食べるものがなくなっちゃうのヨ。」「子どもたちにどんなことをしてるの？」という具合に……。

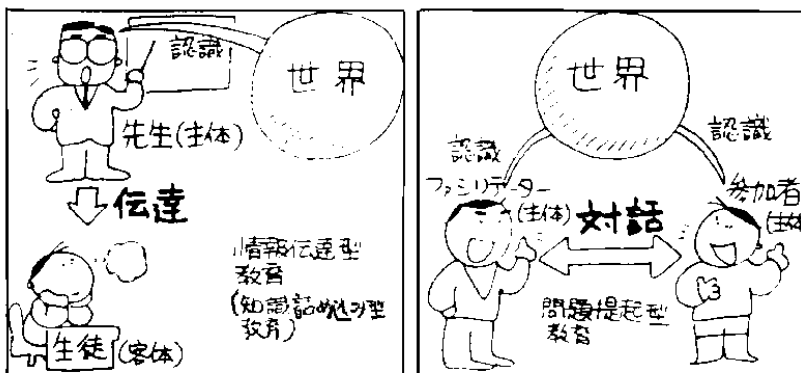
さて、私たちの社会の教育はどうでしょうか。学校での教育は？家庭では？そして、教会では？

学び合いを可能にする「ファシリテーター」

英語の辞書で「ファシリテート」(facilitate)をひくと、「(仕事などを)容易にする、促進する、楽に運ばせる」とあります。問題提起型教育では、「参加者」(ここからは「生徒」と呼ばず「参加者」と呼びます)相互の学び合いを可能にする、促進する役割を担う人のことを「ファシリテーター」と呼んでいます。

国内外に存在する南北問題、差別、抑圧、搾取。そうした現状をどう認識し、原因は何かを、私たちの生き方との関連でとらえ直し、それをどう変えていけるのか、変えていくか……。そうした社会を変えていく実践のためのパワーとエネルギーを創り出し、相互に強め合う（エンパワー）ことを少しでも可能にし、促進する役割を担う人、それを「ファシリテーター」と呼んでいます。教会の「全員奉仕職・信徒使徒職」にも、同じことが言えると思いませんか？

ファシリテーターは、教える人、与える人ではありません。一言で言えば、ファシリテーターは「共に旅する人」(Co-Traveler)だ、と私は思っています。不公正、不平等に満ちた私たちのこの現実世界をどう変えていくか。「私」は、「私たち」はどう生きるか。どこへ向かって、誰と共に……。そうした人生、つまり「生きるという旅」を一緒に歩み、進めようとする人、経験を共有しながら、対話しながら…。これを、私は「ファシリテーター」と呼んでいます。そこでは、ファシリテーター自身も「教え」られ、変えさせられ、強められていくのです。(絵-3参照)



絵-3

こういう言葉があります。

「私たちの前を歩かないで下さい。私たちは、あなたについていきません。私たちの後ろを歩かないで下さい。私たちは、あなたに後ろから押されたくありません。ただ私たちの横にいて下さい。そして、一緒に考え合いながら、一緒に歩みを進めていきましょう」。

これは、多くの NGO が関与しているインドのある地域の村人たちの言葉です。ファシリテーターのあり方、本質を見事に表現しています。

ファシリテーターが大切にしたいこと

- ①参加者を重んじること。参加者を信ずること。すべての人は豊かな経験・知識・技術などをもっていることを確信すること。参加者一人ひとりが「知とエネルギー」の担い手であることを確信すること。
- ②参加者の声、切実な声を聴くこと。耳を傾けること。
* この二つをファシリテーターとしての「対話能力」という。
- ③参加者から学ぼう、ともに歩もうとする姿勢、生き方を絶やさないこと。
- ④「変化は可能だ！」（Change is possible !）ということを信ずること。
- ⑤「自分」は世界（社会）をどう認識し、それを、誰の側に立って（自分の視点）どう変えていきたいか（自分の展望・方向）、という情熱を持っていること。不十分、不完全であっても……。
（実は十分とか完全とかは、どこまでいってもあり得ない。）
- ⑥結果よりも学習過程（プロセス）を重視すること。
- ⑦「成功・失敗ということはない。すべてのプロセスに意味がある、価値がある」ことを信ずること。
- ⑧最後に、私にもできる、可能だと思ふこと。私なりに、私の人格、価値観、私がいま現在持っている「豊かな」ものを用いて……。

（12 頁～16 頁までの「ファシリテーター」の項は池住義憲氏の執筆）

「信徒使徒職リーダーズ・トレーニング」の実際

このトレーニングは、どのように実施すればよいのでしょうか。私たちは、2泊3日のトレーニングを2回実施しました。そのねらいは次のようなものでした。

『牧会』型教会から『宣教』型教会を目指して、
信徒使徒職の役割・意味を探り、
そのために必要な指導性開発を、
相互の学び合いをとおして....一緒にさぐりたい

このねらいに対して、

- * 私たちの教会、神の民に委ねられた使命とは何なののでしょうか。
- * 『牧会』型教会から『宣教』型教会を目指す¹とは、どういうことなののでしょうか。
- * 私たちの教会の現実、どのような姿をしているのでしょうか。
- * 私たちが、こうありたいと願う教会の姿は、どのようなものなのでしょうか。
- * そのために、私たちに何ができるのでしょうか。

この疑問と課題に取り組むのが第1回のプログラムです。相互の学び合いをとおして探って行きます。

第2回のプログラムは、聖書のみ言葉から学びを深めます。聖書の学び方にはさまざまな方法があります。ここで紹介する方法は、信徒使徒職に召し出された私たちが、一緒に育てられ、強められていくための一つの方法です。これを参考にして、みなさんが、みなさんの教区・教会の実情にあった学びを発見してくださることを期待しています。

¹ 『主教会見解』からの引用句。これは『牧会』型教会を否定しているのではなく、信徒を霊的に強めるといふ牧会ができていれば、その教会は神様のみ旨を行う『宣教』型教会になっているはずである。 (委員会の見解)

第1回プログラム (例)

第 1 日	第 2 日	第 3 日
	<7:30~8:00> 朝の礼拝	<7:30~8:00> 朝の礼拝
	朝 食	朝 食
	<9:00~12:00> セッションⅢ	<9:00~12:00> セッションⅤ
	小グループに分かれての ワークショップ 1	今の私にできること したいこと...
	昼 食	昼 食
<14:30~15:00> 受付・チェックイン	<14:00~15:30>	<13:15~15:00> 全体のふりかえり 閉会聖餐式
<15:00~15:30> 開 会 礼 拝	セッションⅢのつづき	<15:00> 解 散
趣旨説明/オリエンテーション		
<15:30~18:00> セッションⅠ	<16:00~16:30> ミッシヨ・デイについて	
仲間づくり・ グループづくり	ブ レ イ ク	
楽しくなごやかに	<16:40~18:00> セッションⅣ	
夕 食	夕 食	
<19:30~21:00> セッションⅡ	<19:30~21:30> セッションⅣのつづき	
ファシリテーターとは？		
<21:00~> 就寝前の祈り	<21:30~> 就寝前の祈り	

セッション I (仲間づくり・グループづくり)

このセッションのねらい

さまざまなゲームをとおして、参加者がお互いを知り合うきっかけを提供します。また互いに知り合うことが、今まで気がつかなかった自分を再発見することになるかも知れません。そして、互いに自由に話すことのできる関係を作りたいのです。

気をつけること

ここではいくつかのゲームを紹介します。ただ、ゲームは知り合うための道具ですから、用意したものを次々とこなすのではなく、ゆったりとリラックスして進めてください。参加者一人ひとりの声が聞こえ、顔が見えてくる、そんな感じを大切にしたいと思います。

1. 65秒

ねらい

インフォーマルな雰囲気の中でお互いを知る。

日常の中の自分自身のあり方、生き方を考えるきっかけに.....

準備するもの

参加者全員が坐れるだけのいすを用意し、円陣に並べます。

導入例

ファシリテーターは、グループメンバーに話し掛けます。

*目が合いましたから聞きますが、私を何才ぐらいだと思いますか。

*皆さん、お互いの名前と顔を御存じですか？

実施

*短い間ですけれど、今まで会ったことのない方と、お互いに自己紹介しあいましょう。「さあ、どうぞ」

*65秒たったところでストップをかける。今いる場所から動かないように大きな声で伝えます。

ふりかえり 1

- *今の位置、皆さんが最初に座っていたところからどれぐらい距離がありますか。
- *どこをどういうふうに歩きましたか。自分の歩いた軌跡をたどってみて下さい。
- *何人の方と紹介しあいましたか？（人数を聞く）
- *いくつかの質問をしましたが、この意味は何だと思えますか？
- *あなたにとっては、どういう意味がありますか？

ふりかえり 2

- *ファシリテーターは、参加者の自由な感想を聞きます。
- *自由に発言してもらったあとで、短いコメントをしても良いと思います。そして最後に、「あと2、3分、まだあつてない方と自己紹介しあいましょう。」と言って自己紹介を続け、「だいたい終わりましたら座りましょう。」呼びかけて、椅子に座ってもらいます。

コメントの例

自分が最初に座った場所が縄張りとなって、その領域をなかなか越えることができない。新しい仲間づくりをする上で、大切な気付きが含まれている。65秒で起こったことを、普段の生活に置き換えて（振り返って）下さい。今までの自分の歩みと今の動きがだぶって来るかもしれない。

2. ジャンケン

(1) 勝ち負けジャンケン

ねらい

制限時間内により多くの人と出会う、また緊張をほぐす。
現実の競争社会の再体験

準備するもの

参加者全員が坐れるだけのいすを用意し、円陣に並べます。
65秒から引続いて行うのも方法です。

導入例

なるべく動き回って、勝負が決まったら別の人とジャンケンをして下さい。できるだけ多くの人として下さい。そして勝った回数を覚えておいて下さい。時間は60秒です。

実施

ファシリテーターは時間をチェックする。

ふりかえり

- *全敗の人、手を上げて下さい。
- *○×回勝った人、手を上げて下さい。(1回から順番に聞く。適当な所でそれ以上勝った人と聞き、回数を言ってもらってもよい。)
- *どうでしたか?→複数の参加者の意見を聞く
- *どうしてですか?→複数の参加者の意見を聞く

(2) アイコがでるまでジャンケン

ねらい

既成のアイデアと異なった視点から物事を見てみよう。

—対等社会の体験……—

勝ち負けジャンケンに象徴される、いつも勝つことを目的とした競争社会にドブブリとつかっている自分を見詰めるために

導入例

アイコが出るまでジャンケンをし、アイコがでたら握手して次の人とジャンケンをして下さい。勝った回数を数えるとか、時間制限はありません。

実 施

ファシリテーターは時間をチェックする。2分程度が適当か。

ふりかえり

- *どちらのジャンケンがよかったですか？→複数の参加者の意見を聞く
- *それはどうしてですか？→複数の参加者の意見を聞く
- *あった時はどんな感じでしたか？→複数の参加者の意見を聞く

3. ネームチェーン

ね ら い

名前を覚える。また名前を覚えることの大切さと意味を考える。

準備するもの

参加者全員のいすを円陣に並べます。

導 入 例

- *皆さん、お互いの名前と顔を御存じですか？
- *1の「65秒」に引続いて行う時には、
「お互いの名前と顔を覚えられましたか？なかなか難しいですね。今度はちょっと気合を入れて覚えましょう」

実 施

- *円陣になって座る。
- *ファシリテーターが適当な人を指名し、その人に名前を言ってもらう。
- *その左隣（あるいは右隣）の人は、最初の名前を言い、ついで自分の名前を言う。
- *この要領で、最初の名前から始めて自分の前にいる人の名前を順に言っていく。
- *一周すれば終了。

ふりかえり

顔を見ながら、顔と名前が一致するように、ちょっと引っ掛かったらみんなでフォローしましょう。

覚えようとする覚えられますね。でも、忘れる場合があるんですね。その場合は、「ええっと、お名前なんとおっしゃいましたっけ。(相手が姓をいった後) いやいや、姓じゃなくて、名前の方」という失礼にならないかもしれませんね。

- *自分の名前を正しく呼ばれたとき、どう感じましたか。
- *うれしいという感じは大切ですね。
- *ちょっと、間があったとき、どんな感じでしたか？ちょっと寂しいという感じもありますね。
- *ネパールでは、何人いても一人ひとりに「ナマステ（こんにちは、おはよう、などの挨拶言葉）」と言います。一人ひとりの出会いと関係を大切にしています。

4. 4つの選択

ねらい

- *緊張をほぐし、親しみを持つ。(仲間づくり)
- *決めにくい選択をすることで、自分自身の発見とその仲間を知る。

準備するもの

B4程度の白紙に4つの選択する言葉(1つ1枚)を書き、それを数種類用意する。

導入例

*大きめの輪を作って、椅子を引いて座って下さい。今から申上げる事柄の中から選択して、同じものを選択した小グループで話し合ってみましょう。

実 施

*選択肢の例は以下のようなもの

1～3月、4～6月、7～9月、10～12月、
金、銀、銅、鉄、
赤、青、着、緑、
春、夏、秋、冬、
サザエさん、かつお、波平、ますお、
ペトロ、トマス、ヨハネ、パウロ、

ふりかえり

*ここでは特に「ふりかえり」はしません。同じ意見・考え方の人と考えを共有すること、自由に話し合うことができると感じてもらえば十分です。教会でも質問を変えれば使えると思います。

5. 3つのキーワード

ね ら い

お互いを知り合う。

自分自身を知る。ふりかえる。

準備するもの

A4 か B4 程度の紙(各自1枚)

人数分のマーカー(色は何でもよい)

導 入 例

*何色のマーカーを取ったか見せてください。

*色を見渡してみて、何か気が付きませんか。一般的に言って女性は明るい色、男性は黒っぽい色を選ぶことが多いようです。これをジェンダー（生れた後に、男らしさとか、女らしさという形で付け加えられたもの、社会的性差）とも言います。

*それでは、まず紙を3等分に折ってください。その一マスに1つつつ、自分自身をこのグループの人たちに紹介するキーワードを三つ書いてください。

実 施

*全員がほぼ書き終わった頃に、

*一人ひとり順番に、紙を見せながら、キーワードについて簡単に説明してください。

<各人の書いたジャンルを記録しておくともよい>

ふりかえり

*ここでは特に「ふりかえり」はしません。

*以下のようなことを付け加えて、まとめに替えてもよい。

「更に三つ、更にもう三つ書くとだんだん書くことがなくなって来る。そのときには、自分の紹介だけでなく、自分を振り返り、自分を知ることにつながっていくのではないだろうか」

セッションⅡ（ファシリテーターとは）

このセッションのねらい

このセッションはレクチャー（講義）です。

ファシリテーターとはどんな役割をとる人かを理解してもらいます。

内容は、《「信徒使徒職リーダーシップ・トレーニング」を始める前に》（本書10頁～16頁）を参考にしてください。

気をつけること

いわゆる講義調ではなく、参加者の顔や反応を見ながら、語りかけるように話すこと。また絵や劇（参考資料の項を参照）を用いるのも方法でしょう。

以下は1997年6月に実施されたトレーニングでの概要です。参考にしてください。

導 入

生まれ月のグループ（1～2月、3～4月、5～6月、7～8月、9～10月、11～12月）に集まってください。

各々のグループで、「教育」という言葉から思い浮かぶ言葉、文章を思いつく限り書き出してください。

その中から教会教育に当てはまるものに丸をつけてください。

③の中で、否定的なものに太下線をつけてください。

各グループで③を読み上げてください。

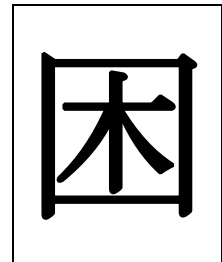
これらは私たちの教会教育の現状ではないでしょうか。そこからスタートすることにしましょう。

新しい教育について紹介しましょう。

1. 「困」

* 困るという文字の成り立ちは？

＜木が囲いの中にあって成長出来ない。だから「困る」＞
アジアの漢字文化圏でない国の人にこの字をだしてみたところ、木を人と解釈して、「人」が囲いの中にいるのだから「安全」と解きました。



* では、どうしたらよいのでしょうか？

＜囲いを取るか、木を取り出す。しかし、こんな発想もある。囲いは外さず、適当な栄養分を与え、生かさぬよう・殺さぬようにする。＞

*アジアの人が貧困で困っている。それに対して根本的社會基盤の変革はしないで、水・毛布・食料など対処療法的援助をする、という現実。生かさぬよう・殺さぬよう……

*皆さんの現実の中で、このような「生かさぬよう、殺さぬよう」な状況、かわりをしてはいないでしょうか？

<参加者の意見を聞く>

2. Education (11頁を参照してください。)

3. Development (11頁を参照してください。)

4. もし、私が……

もし私が、アジアで公衆衛生（トイレの作り方）について教育をするとしたら、どんなふうにするでしょうか。

政府の役人役になって、伝達型の教育をする。

「この地域は伝染病等の発生率が非常に高い。その結果、多くの高齢者や幼児が死亡している。その原因はあなたがたに公衆衛生に関する知識が皆無だからである。そこでこの地域に衛生的なトイレを作る必要がある。その作り方はこれから配布する書類に書いてあるので、そのとおりに作るように。…」
ケース・ワーカー役になって、絵を見せての説明をする。

「皆さん、トイレとはどういうものかご存知ですか。トイレとはこういうものです。その作り方は、この絵のように穴を掘って、周りに囲いをし、……」

NGOの人が体験教育をする説明をする。

「実際にトイレを作ってみましょう。道具はここにありますが、あなたはここに穴を掘ってください。はい、穴ができま

した。次ぎは……」

参加者に考えてもらい、意見を引き出す。

「この村の普段の生活を絵に描いてみてください。

この川の上の家では排便はどうしているんだろう。

川に流しているんですか。

下の家では野菜なんかはどこで洗っているの？

じゃ、排便はどうしたらいいんだろう。……」

*私がアジアの民で文字の読み書きができないと仮定した場合、

〇〇〇〇にはどんな動詞が入るでしょうか？

(次頁の文章は、ホワイト・ボードなどに書くと良いでしょう。)

1. もし私がそれを聞いたら、私はそれを、〇〇〇〇だろう

<忘れてしまう>

2. もし私がそれを見たら、私はそれを、〇〇〇〇だろう

<覚えている>

3. もし私がそれを体験したら、私はそれを〇〇〇〇だろう

<理解する>

4. しかし、もし私がそれを〇〇〇〇したら、

私はそれを生き方の中に取り入れて実践するだろう

<発見する・発掘する>

< >は解答です。参加者に聞いて見ましょう。

< >内と同じ意味の答えが返ってくればOKです。

①は講義です。しかし権威主義的であり、聴いてもおうおうにしてそれを忘れてしまいます。

②は視聴覚を使いますが、覚えていてもそれだけで、変化はありません。

③は体験学習ですが、理解するけれども生き方には繋がりません。

④は①・②・③を取り混ぜながら、対話を通し、意見を引き出しつつ、参加者が自分の賜物・生き方を発見できるように援助しています。

聞かせられる、見せられる、やらせられるのではなく、自分で発見・発掘したら、ということが大切です。変化を気付かせられるのではなく、自分で発見できるよう援助する人を、「ファシリテーター」と言います。

5. やってみよう、『問題提起型』教育！

ファシリテーターは、学びのきっかけとして、まず一枚の絵（左上の絵－4）を参加者に提示します。そして、



絵－4

* 「この絵、よく見てください。何が描かれてありますか？」

* 「この絵をみて感じたことを自由に言ってください。どうですか？」などと質問します。

* 「何を言ってもいいんですよ、正解とか間違いなんてないんだから。」という具合に。

ファシリテーターは更に問いを

投げかけていきます。

* 「この女性、誰だと思えますか？」

* 「どこの国の女性にみえますか？」

* 「その場合、この女性の背中におおいかぶさっている大きな石は、彼女が暮らしている社会のなかで考えると、何を指していると思えますか？」

* 「では、その石を縛っている縄は？」

* 「足にはめられている鎖は？」

* 「その鎖を止めている後ろの大きな岩は？」

* 「彼女の口に貼ってあるテープは？」 などなど。

このように、一枚の絵がきっかけになって、参加者一人一人が自分の視点、価値観、経験から問題・課題を自分で発掘していきます。与えられるのではなくて。ファシリテーターは、問いを投げかけることによってそれをより可能にする手助け役です。

問いかけは更に続きます。

* 「この絵に描かれてあるようなこと、あなたは今までに経験したことがありますか？」

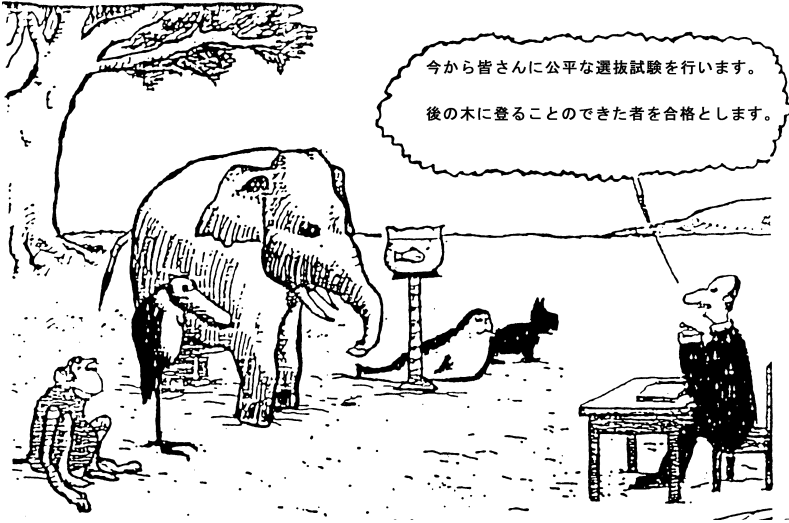
* 「私たちの社会のなかに置き換えて考えてみると、どうですか？」

* 「この絵には女性が描かれていますが、子ども、障害者、エイズ感染者、野宿労働者、外国人労働者、被差別部落の人たちに置き換えてみるとどうでしょうか？」

* 「その場合、石、縄、鎖、テープ、岩はそれぞれ何を指しているのでしょうか？または、『誰』なのでしょうか？」

こうした問いによって起こる話し合い、つまり「対話」を大切に、ファシリテーターは参加者間相互の学び合いをより可能に、より深めていきます。そして、必要でありかつ可能であれば、後半の方で関連した参考資料など、ファシリテーターがもっているものを共有します。

次頁にいくつかの絵をあげておきます。私たちはそれらの絵からどんな事柄を引き出すことができるのでしょうか。



絵-5

「これを学べ、なぜと聞いちゃいかん」

LEARN THIS AND DON'T ASK WHY! - BLA, BLA, BLA...



EDUCATION OF AUTHORITY:
putting ideas in

絵-6

△「イエッサー、有難うございます。そのとおりです、先生。」

「それ君はその考えについてどう思う?」

SO WHAT DO YOU THINK OF THAT IDEA?

I HAVE MY DOUBTS, IN MY OWN EXPERIENCE...

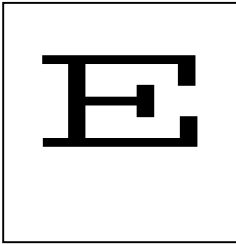


EDUCATION OF CHANGE:
drawing ideas out

絵-7

△「私はちょっと違うと思います。私の経験では…」

6. コードについて



円陣を作り、左の図のような記号を書いた紙を真ん中に置き、「皆さんの方から見て何に見えますか」と聞きます。

<参加者に自由に発言してもらおう>

同じものを見て、見る方向からまったく異なった解釈できます。

それは経験・生活・視点が異なるからでしょう。

「情報伝達型」の教育は、伝える側が伝えるべき明確なメッセージを持っており、自分の方法から見て見えるものだけを正解として、他を切ってしまう教育です。

「対話型・問題提起型」の教育とは、一つのをきっかけ（コード）にして、参加者がさまざまな意見を出し、自分の枠を取り払って問題を共有し、対話を通して学びあう方法です。従って、メッセージは絵が示しているのではなく、絵が材料となって見る者が、自分なりに自分の生活経験とダブらせて問題を発見・発掘するのです。

このようにきっかけとしての教材となるものを「コード (Code)」と言います。それを質問などを通して引き出す役割をとる人が「ファシリテーター(引き出し役)」なのです。

ではどのようなものが「コード」になるのでしょうか。

*絵、ポスター、イラスト、写真

*新聞、雑誌、

*聖書、聖歌／讃美歌、

*歌、音楽、

*詩、民話、物語、昔話、一つの言葉、文字、

* ドラマ（無言劇、『てにをは』を入れない有言劇）、

* 討論劇

劇を途中までやってストップし、見るものに先はどうなる
と聞く。その結果を劇のストーリーに取り入れる。

* 同時進行劇、新聞劇、静止劇、

* 見えない演劇

たとえば、地下鉄の中で2人の女性に3人の男性が嫌がら
せをする、その時、他の一般の乗客がどのように立ち向か
うか、アウグスト・ボワールはこれを130回ほど演じた。そ
の結果、地下鉄内の痴漢行為・暴力がへった。

* ゲーム、エクササイズ、クイズ、

* 人形劇、フランネルチャート、人体劇、

* 模擬体験劇、現場訪問、

このように、絵だけではなく、いろいろなものがコードとして使
うことができます。

7. コードとしての劇

短い劇を演じます。無言劇でも有言劇でもかまいません。

出演者は3人。

絵-8（次頁）のようなイメージで即席に”舞台”をつくります。

チョークで書くかまたは紐か棒で床に川を作ります。幅の広い川
の方がいいでしょう。川の中央あたりに中之島を作ります。そして、
一方の川岸から中之島までと、更にそこから向こう岸まで歩いて渡
れるような置き石を適当に作ります。これもチョークで書いてもい
いし、古新聞紙や座布団、毛布などを使っても結構です。

劇のシナリオはこうです。



絵-8

- ① 2人(AさんとBさん)の人が手前の川岸で困っている。点在している石を歩いて向こう岸へ渡りたいのだが、流れが急で恐くて渡れない。
- ②そこへもう一人(Cさん)がやってくる。2人はCさんに自分たちを背負って向こう岸まで連れてってくれるよう、お願いする。
- ③Cさんは始めは断るがあまりに懇請するので、やむなく引き受ける。はじめにAさんを背負って慎重に石の上を歩いて中之島まで運ぶ。そこでAさんをおろして岸へもどる。
- ④BさんもCさんに背負って運んでくれと頼むが、しかし、Cさんは疲れてしまってもう運ぶことができない。そこでCさんはBさんに、今度は石の上を歩いて渡るように、はじめは手をつないでガイドし、一歩ずつゆっくり渡り、中之島まで着く。
- ⑤今度は中之島から向こう岸までだ。Aさんは前と同じようにCさんに背負ってくれと頼むが、Cさんはもう疲れているのでそれを断る。そして、Bさんの手を軽くとり、ガイドしつつ一緒に無事、向こう岸まで渡る。渡りきった二人(BさんとCさん)は共に手を取り合っ
て喜び、2人でスキップしてながら、さらに先に歩みを進めいく。中之島に残されたAさんを振り返りもせずに。
- ⑥中之島に残されたAさんは、去っていく2人に助けを求め続ける。一歩も動くことをせずに。

劇のあとに、ファシリテーターは、参加者が自由に感想、印象を述べ合う「場」を大切にします。どんなふう感じたか、どのよ

うな問題・課題を感じ取ったか、自分にとってのメッセージ・意味は何かなど…。そして、どうしてそう感じたか、ということも。

ファシリテーターは、更に次のような問いを投げかけます。

- * 「困っている二人へ、Cさんがとったアプローチの違いは？」
- * 「なぜ、最後にAさんを取り残してBさんとCさんは行ってしまったのか？」
- * 「このなかで、あなたは何処にいますか？」
- * 「こうしたこと、現実の私たちの生活のなかに、また、社会のなかで起こっていますか？」
- * 「これを、家庭の親子関係、障害福祉、海外援助などの領域に置き換えてみるとどうですか？」
- * 「更にこれを、『教育』という領域に置き換えてみると？」など。

ここに紹介した事例では、「一枚の絵」と「劇」が学びのきっかけとして用いられています。これを問題提起型教育では「コード」と呼んでいます。

ファシリテーターはコードを“起爆剤”として用いて、参加者の想い、関心、経験、アイデア、疑問などを引き出します。その過程で、一人ひとりが自らの視点、経験に基づいて問題・課題を「発掘」していきます。そして、他の参加者との「対話」を通してその問題の原因を考え、解決方法または自分（たち）のこれからの生き方を見出していきます。

信徒使徒職としての私たちの役割は、教会・地域の中で参加者が、その人の経験・立場に立って、教会教育や地域での奉仕の働きについて、対話をとおして相互の発見・発掘しあえるよう援助することではないでしょうか。(池住)

セッションⅢ（小グループに分かれてのワークショップ 1）

このセッションのねらい

このセッションは5～6人の小グループに分かれて行うワークショップ（作業）です。

私たちが信徒使徒職として遣わされている地域社会・教会の現実を探ります。そしてワークショップの過程の中で起こる様々な事柄、何がコードになるのか、ファシリテーターとは、といったことにも思いを巡らせます。

気をつけること

このセッションでは一つの課題が与えられます。しかしねらいにもあるように、課題達成が最終目的ではなく、作業の過程（プロセス）にも心を向けるようにしましょう。プログラム上での時間はある程度弾力的に考えましょう。

課題

自分の教会あるいは日本聖公会の現状を各自で絵にする。
その後、グループで分かち合い、一つの絵にする。

準備するもの

各自 B4 用紙 1 枚、各グループにマーカーと発表用の模造紙 1 枚

導入例

最初の 30 分間は一人になって沈黙のうちに、自分の所属する教会あるいは日本聖公会の現状を絵にしてください。

その後、グループで分かち合い、教会（日本聖公会）の現状を一つの絵にしてください。ただし文字による説明は入れないでください。

ここでは絵の得意・不得意は関係ありません。

マーカーはどの色でも自由にお使いください。

また、グループでの作業が終っても、指示があるまで他の人には見せないでください。

【絵を画くことに抵抗する意見が出るかも知れないので】
各自で絵にするのは、各自が自分の意見を持つためです。
また最初からグループ作業をすると、絵の上手な人や、意見の強い人に引きずられてしまう恐れがあるからです。

実 施

30分 一人になって沈黙のうちに絵を画く。

150分 グループで分ち合い、一つの絵にする。

*グループは年齢・性別・教会(教区)を考慮して、なるべく均等になるよう、あらかじめスタッフが分けておきます。

全体での分ち合い

*ファシリテーターは各グループの進行状況を見て、予定の時間になったら全体で集まります。会場の設定は、各グループの絵を参加者全員が見ることのできる形で座るように伝えます。

また、絵はグループごとに鑑賞するので、呼ばれるまでは丸めておくように言います。

*全員が座ったところで、次のように言います。

「皆さんは美術館に行かれたことがあると思いますが、そこに展示されている絵には、それを描いた芸術家の名前と絵の題名が記されているぐらいで、その芸術家が語りたいたいことは何も記されていません。なぜなら、芸術家は自分の思想を全部自分の作品の中に込めているからです。皆さんも今までの約3時間、心と思いを込めて素晴らしい芸術作品を創造してくださったわけですが、その作品をこれから皆さんで鑑賞したいと思います。

作品はグループごとに鑑賞しますが、その時、その作品を描いたグループの皆さんは発言することができません。先ほども言ったように、芸術家は自分の思想を全部自分の作品の中に込めているからです。それでは〇〇グループの方、作品の展示をお願いします。」

*作品が展示されたら、ファシリテーターは次の質問をする。質問内容と順序は、全グループに共通。なお、質問の順序が重要なので、注意してください。

①どういう形が見えますか？

*ここでは丸とか四角という客観的な形を問う。家とか、教会という答えは解釈になるので待ってもらおう。

②どんな色が使われていますか？

③これは何を表わしていますか？

*ここで①の形の解釈を聞く。

④この絵からどんな声が聞こえてきますか？

⑤この絵に向かって、あるいは絵の中のどの人物に向かって、どんな声をかけてあげたいですか？

⑥この絵は、何を表わしているのでしょうか？

*それぞれの質問に対する参加者の十分な声(応答)を引き出すように工夫すること。

*一通り応答が出たら、今度は作者グループに聞きます。

①今まで沈黙を守るというのは難行苦行だったかも知れませんか。作者グループの皆さんは、他のグループの皆さんの鑑賞眼、批評をお聞きになって、どんなふうに感じましたか。

②作者グループとして、他のグループの皆さんに、これだけはぜひ伝えたいということがありますか。

*このセッションを終えるにあたって、ファシリテーターは短いコメントを述べてもよいでしょう。例えば、

①それぞれの絵が私たちの現実の教会の姿である。

②一つ一つの絵から、さまざまなことに気づかされたが、それはこれらの絵が「コード」の働きをしているからである、等。

③絵そのものの評価はしないようにしましょう。

ミニ・レクチャー

このセッションのねらい

このセッションは、いわゆる「情報伝達型」です。伝えたいことは、何気なく教会内で使われている伝道・宣教という言葉が、ここ 40 年あまりの間にその意味内容、考え方において変化していること、神、教会と世界の関係についての考え方が大きく変わってきたことです。

セッションⅢで参加者が分析した教会の現実、セッションⅤで考えようとしている自分たちのこれからの姿、この二つのセッションを結ぶものが、このレクチャーです。

以下はその一例で、レクチャーの時間は約 30 分程度です。

気をつけること

講義調にならないように注意しましょう。

時間に余裕があれば、洗礼堅信式と職務（奉仕職）についてのレクチャーがあってもよいと思います。

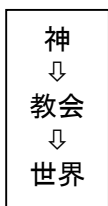
Missio Dei（ミッシオ・デイ、神の宣教）について

Missio Dei＝神様のミッション、神の宣教と訳されるラテン語

日本聖公会が出来て 110 年ぐらいになるが、なぜ出来上がったかというと宣教師がきて伝道してくれたからである。400 年前にカトリックの宣教師がきてキリシタンができた。プロテスタントの人たちは伝道しなかった。プロテスタントが伝道を始めたのは 19 世紀のことであった。それがたまたま日本の開国の時期と重なっていた。

プロテスタントはアメリカに移民していったが、彼らは現地のインディアンを「神様の知らない無知蒙昧な人たちである。また新大陸には人がいるはずがない、彼らはアダムとエバの子孫ではないから動物である」と考えていた。

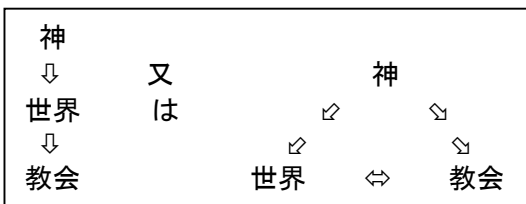
19 世紀になったの考え方は、「何もキリスト教を知らない人たちに伝道する」ということであった。神様のことを知っているのは教会だけ、キリスト者だけであるから、彼らに一方的に教える注入型であった。救われない人々を救いの器である教会に導かねばならないという考え方であった。従って、神を知っているのは教会だけである。教会の外には救いがない。そこで世界に伝道して教会の中に入れなければならない。教会が教えるところを従順に受け入れないさい、というのが 19 世紀からつい最近までの考えであった。



しかし、教会が世界伝道をしたおかげで、別の考えが 20 世紀に入ってから生まれてきた。① 教派主義的拡張に意味があるのかという疑問から、エキュメニカル運動が始まった。② 異教徒はイエスキリストを知らないがゆえに無価値だったのだろうか、そうではなくヨーロッパではあまり考えられなかった価値観を認めるように認めるようになった。たとえば、自然を支配するのではなく、自然と共に生きていくという考えを見出していった。聖書を読む視点が変わってきた。

ここから、神は宣教師がいく前に世界の中に働いておられるという考えが生まれる。

教会は、世界の中に働いている神の働きを発見して、神の働きに参加して（パートナ



一となって) いく。イエスの働きを考えると、一人ひとりのいろんな状況に対して関わり、その人たちが神の祝福の対象だと知らしめる。具体的である。世界も教会も神の働いておられる場である。いずれにせよ、神の世界の中での働きは、分かち合いの中から発見できるのではないか。すなわち答えは一つではない。

もう少し詳しく知りたい方のために

『神の宣教』(Missio Dei) という理解について

司祭 西原 廉太

(協力委員・立教大学文学部助教授)

近年いろいろな場で、「神の宣教」「ミッシオ・ディ」という言葉を耳にされることがあると思います。この「信徒使徒職リーダーズ・トレーニング」もまた、「神の宣教」理解を大切なベースとされています。しかしながら、日本聖公会での現状は、「神の宣教」を強調される方々も、何かしら社会的活動を支える水戸黄門の印籠的に使ったり、あるいは反対される方々も、そのすべて「神の宣教」が悪いのだ、とかたきのごとくに批判されたりしているような気がします。ところが実際には、「神の宣教」という言葉だけが一人歩きし、その内実は意外に正確には伝えられたり、表現されてはいないのではないのでしょうか。そこで、ここでは、「神の宣教」とは一体何なのか、ということをお私なりの理解で整理してみたいと思います。

『神の宣教』論の出発

「神の宣教」論の出所は1950年代中盤の、エキュメニカル運動の流れの中にあるようです。中心的な働きをなしたのは、中でもホーケンダイクという神学者でありました。ホーケンダイクが提起した議論の焦点は、従来の植民地的な欧米型宣教(western mission)に対する深刻な反省にありました。宣教の招きと責務の源は、教会にではなく、三位一体なる神の本性から来ていることを確認し、宣教の主体は「神」にあると、教会中心主義から神中心主義への転換を図ったのでありました。

これこそが『神の宣教』理解の出発点であるわけですが、その後、ホーケンダイクの理解はより明確となっていきます。「私たちは、事物を、神—世界—教会（神—教会—世界でなく）の背景においてみます。神は、この世界に関心をもっていたまいます。世界こそ神の行動の場所（locus）であります。教会とは、このことが知られ、認められ、尊敬されるこの世の一部分にほかなりません。」（ホーケンダイク『明日の社会と明日の教会』戸村正博訳、新教出版社、1966年、5頁。）「教会は、神の伝道に参加すべく構成されます。従って、あらゆる教会の構造は、それがどこまで神の派遣（＝伝道）に仕えることができるかどうかを試されなければなりません」「この神の伝道の内容は、『人間化』、すなわち、人間をもう一度、人間らしくすることであると要約されます。あるいは、『シャーロームのしるしを樹立すること』といってもよいでしょう。それゆえ、教会は、私たちの生活の真の問題点をめぐって（わたしの新造語を使えば）、シャーロームを来たらせる（shalomatizing）神の行為に参加するでしょう」（同書、6頁）。「伝道の目的は、イスラエルがメシヤに期待したこと。すなわちシャーロームの樹立以外のことではない。そしてシャーロームとは、個人的救い以上のものである。それは、同時に平和、統合、共同、調和、正義であった」（同書、23頁）。

もちろん、このホーケンダイクの理解に対して数多くの批判がなされていることもまた事実です。例えば、W. アンダーセンは、このように指摘しています。「われわれは、ホーケンダイクが教会と世とを終末論的に同じ平面に置くことに対して、警告を発しなければならぬと考える。教会は単に世へとつかわされたもの（Sendung）であるだけではない。それと同時に、世において集められたもの（Sammlung）である。」（『福音宣教の神学』、335頁。）

WCCウプサラ総会（1968年）

『神の宣教』を考える時に、ホーケンダイク世代を出発点としなければならぬことは当然ではありますが、ここで留まっているだけでは、その後の『神の宣教』論の発展を理解することはできないであります。『神の宣教』論自体が、エキュメニカル運動の発展の中で深化されていったということは不可避的な事実です。とりわけ、WCC（世界教会協議会）宣教研究グループがウプサラ総会（1968年）に向けて、1967年に提出した『他者のための教会』レポート〔WCC, *The Church for Others* (Geneva: WCC, 1968)〕は、『神の宣教』論を考える上でも絶対不可欠な画期的報告であると言えます。レポートは、宣教の場とは静的で完成された世界ではなく、歴史としての世界であり、変化する世界であると規定します (Ibid., p.13.)。「派遣される神」の『神の宣教』に参加することは、歴史における神との協働に入ることであり (Ibid., p.14.)、『神の宣教』の最終的帰結は、シャロームの実現にあると強調します (Ibid., p.15.)。レポートは、教会の形態論的ファンダメンタリズムを批判した上で (Ibid., p.19.)、他ならぬ「世界」こそが教会に宣教の主題（アジェンダ）を与えると結論づけています (Ibid., p.20.)。

このレポートは、1968年WCCウプサラ総会で報告され、大きな評価を与えられました。さらに、ウプサラ総会は、『神の宣教』理解を基本に据えながら、宣教活動が絶えずイエス・キリストを現代的に、また説得的に証しているかどうかの「永続的基準」を確認しています。それは、①教会は、貧しき人、保護されていない人、虐げられている人、疎外されている人々の側に身を置いているかどうか、②教会は、キリスト者が他者の課題を共に担うように導いているかどうか、また教会組織がこの世界に参加するものにふさわしいものとなっているかどうか、③教会は、他の人々と共に、時のしる

しを見分けるためにふさわしい状況に身を置いているかどうか、また新しい人間性の到来に向けて歴史の中で活動するために相応しい状況にいるかどうか、です。この『他者のための教会』～ウプサラ総会の宣教理解が、その後の WCC の宣教論的基盤となり、現実課題の中で、具体的な働きとして生かされてきていることは明白でありましょう。

ランベス会議～ACC

聖公会のランベス会議や、ACC（全聖公会中央協議会）が、WCCの諸会議、協議会と密接に関係し合っていることは言うまでもありませんが、ウプサラ総会と同年に開かれた1968年ランベス会議にはこのような表現が見られます。「キリスト者の主は世界の中に生きたもう。キリスト者はこの世で主に仕え、主を見出さねばならない。主は世界にとっても教会にとっても、真実の希望の源泉であって、歴史をその本来の目的へと導かれるお方である。」（『1968年ランベス会議』日本聖公会出版部、1969年、64頁。）また1988年ランベス会議では、「宣教の場」をこう定義しました。「宣教の場は全世界である。すなわち、飢えた世界、不正の世界、怒れる世界、恐怖の世界である。汚染され、回復不能な損害の危険の中にある世界である。しかし、それはまた、善意と愛が溢れている美と希望の世界でもある。正義と完全と平和を求めて苦闘している世界である。神に属する世界である。」（『1988年ランベス会議』八代 崇他訳、日本聖公会管区事務所、1990年、31頁。）さらに、1990年にウェールズで開催されたACC8では、「教会の宣教」を明確に定義しています。「教会の宣教（Mission）は、(a)み国の良き音信を宣言すること、(b)新しく信者になった人を教え、洗礼を授け、養育すること、(c)愛の奉仕によって人間の必要に答えること、(d)社会の不正な構造を変革する

ように努めること、(e)被造物の本来の姿を保護するように努め、地球の命を支え新たにすることである。」(『壊れた世界での宣教・ACC8』飯田徳昭訳、日本聖公会管区事務所、1991年、113頁。)

ジョージ・ケアリー、カンタベリー大主教は1993年のACC9の全体講演の中でこう述べられています。「神の宣教(Missio Dei)は、すべてを新たにし、形作り、再生させるという、神の全体的な活動である。(中略)キリストは単純に人々に言葉を説きにおいでになったのではない。キリストは彼らを癒し、その当時の秩序に挑戦し、人々への見方に挑戦し、特権を持っていない人、女性、奴隷、子供の生活に触れられたのだ。そして一方で、教会はイエス・キリストを主また救い主として告知するために存在するのだと主張するのは正しいことだが、教会は弱者に対する同情的な配慮の業から切り放された形で、告知をするのではない。教会が全体的にいのちへの配慮に従事する時に、それは神の救いの活動に入っていくのである。」

(『変容を起こさせるヴィジョン・ACC9』飯田徳昭訳、日本聖公会管区事務所、1994年、90頁。)1998年のランベス会議では、全アングリカン・コミュニオンの共通課題として、重債務最貧諸国の国際債務を2000年を目標にキャンセルする運動を担うことを決議しましたが、このような決議の背景には、まさに「神の宣教」理解があるとと言えます。

『神の宣教』の中に生きる教会

もっとも、ランベス会議等には制度的拘束力があるわけではないので、カンタベリーやランベスやACCがこう言っているからといって、日本聖公会もこれらの認識を絶対に持たなければならないという訳ではありません。ただ、こうしたアングリカン・コミュニオンの理解に対して、私たち日本聖公会は、私たちの現実の中からいか

に応答をするのかという問いは避けられるものではありません。冒頭にも記しましたが、日本聖公会の中では『神の宣教』論が、その内容と実践についてしっかりと吟味されることなく、言葉だけが一人歩きしている感を受けざるを得ません。『神の宣教』が流行語のように使われることへの批判はモルトマンをはじめとして、70年代中頃からすでに数多く為されているところです。『神の宣教』論が何であったのかを「研究」することが大切なのではなく、『神の宣教』理解の中で醸成されてきたものをいかにパリッシュの現実の中で受肉化させることができるのかが問われているのだと考えます。ケリュグマ（御言葉）とディアコニア（奉仕）の交点にのみコイノニア（交わり）は生まれます。逆に言えば、ケリュグマとディアコニアのどちらが欠けても、コイノニアは生まれません。真の『コイノニア』が実現できた時に初めて、私たちは『神の宣教』の中に生きていけると言えるのではないのでしょうか。

セッションⅣ（小グループに分かれてのワークショップ 2）

このセッションのねらい

このセッションは、セッションⅢと同じワークショップ（作業）です。

私たちが信徒使徒職として遣わされている世界の中で、教会の働きについて探ります。

気をつけること

このセッションでも課題が与えられます。しかし課題達成より作業の過程（プロセス）で生じるであろう、様々な意見・考え方に目を向けましょう。

課 題

こうあってほしい教会、こうしたい教会を、グループで話し合っ
て一つの絵にする。

準備するもの

各グループにマーカーと発表用の模造紙 1 枚

導 入 例

グループで話し合い、教会（日本聖公会）のこうあってほしい姿
を一つの絵にしてください。ただし、文字による説明は入れない
でください。

また、グループでの作業が終っても、指示があるまで他の人には
見せないでください。

実 施

120 分 グループで分ち合い、一つの絵にする。

*グループは、セッションⅢと同じメンバーです。

全体での分ち合い

*会場設定やルールはセッションⅢと同じです。

*一度経験していますから、導入の言葉は特に必要ではないかも

しません。簡単に次のように促すと良いでしょう。

「作品をこれからみんなで鑑賞したいと思います。

ルールは前と同じです。それでは〇〇グループの方、作品の展示をお願いします。」

*作品が展示されたら、ファシリテーターは次のように質問する。
質問内容と順序は、全グループに共通。

①この絵からどんな声が聞こえてきますか？

②この絵を見てどんな感じがしますか。

③この絵が示しているメッセージ、この絵が物語っているものは何でしょうか。

*それぞれの質問に対する参加者の十分な声(応答)を引き出すように工夫すること。

*一通り応答が出たら、今度は作者グループに聞きます。

①作者グループの皆さんは、他のグループの皆さんの鑑賞眼、批評をお聞きになって、どんなふうに感じましたか。

②作者グループとして、他のグループの皆さんに、これだけは是非伝えたいということがありますか。

*ファシリテーターは、現実の教会とこうあってほしい教会の姿をそれぞれ張り出して、参加者全員が見たり話し合ったりできるようにします。

セッションV（今の私にできること、したいこと）

このセッションのねらい

これはどんなトレーニング・プログラムにも共通することですが、この場で行われたことをそのまま現場に持ち帰って実行できるとは限りません。特にセッションIVで考えた「こうあってほしい教会の姿」は、それを現実化するには時間と努力が必要なことは明らかです。しかし参加者はすでにどんなことが必要か、どこに向かって歩いていけば良いかということに気付いています。

そこで、このセッションでは参加者が気付いた(再発見した)ことを現実のものとするための第1歩となるような、自分自身にできる課題を設定してもらいます。

課題

個人で、教会の中で、自分の現場で、

- ①当面できること、すぐにでもしたいこと
- ②時間がかかってもしてゆきたいこと を考える。

グループで、これらを分かち合い、模造紙に箇条書きで書き出す。

準備するもの

各個人に B4 の紙 1 枚、

各グループにマーカーと発表用の模造紙 1 枚

導入例

今までこのトレーニングを通して、私たちの教会の現実の姿、こうあってほしい姿を探ってきました。そして、その中で私たちが信徒使徒職としてどういう働きを神様から期待されているかを、再発見されたと思います。

そこで、このセッションでは今までに皆さんが見出されたさまざまなことの中から、「私が、教会の中で、自分の現場で、①当面で

きること、すぐにでもしたいこと、そして②時間がかかってもしてゆきたいこと、を考えていただきたいと思います。

まず、お一人で30分程度考えてください。その後、グループで分ち合ってください。そして2時間後にはここに集まって、全体で分ち合いの時を持ちたいと思います。グループからの報告はどういう形でも結構です。

実 施

30分 個人で、教会の中で、自分の現場で、①当面できること、すぐにでもしたいこと、②時間がかかってもしてゆきたいこと、を考える。

90分 グループで分ち合う。

60分 全体で分ち合う。

*グループは、セッションⅢと同じメンバーです。

全体での分ち合い

各グループからの報告を聞きます。

全体のふりかえり

このセッションのねらい

2泊3日の研修をふりかえり、スタッフも含めた各々の思いを分かち合います。

導入例

この時間は、今までの2泊3日のことをふりかえりたいと思います。

*1日目、不安と期待のうちにここに来て何をしましたでしょうか。

——仲間づくりのゲームとファシリテーターとは

*2日目、コード、現実の教会を描く、ミッシオ・デイ

*2日夜から今まで、

今から一人一人が派遣された生活の場に戻ろうとしています。どんなことでもいいですから、今の思いを述べてください。

<参加者に、今感じていること、

思っていることを自由に述べてもらおう。>

第2回プログラム(例)

第1日	第2日	第3日
	<7:30~8:00> 朝の礼拝	<7:30~8:00> 朝の礼拝
	朝食	朝食
	<9:00~12:00> セッションⅢ ワークショップ 自分たちで作る バイブルシェアリング	<9:00~12:00> セッションⅤ 全体のふりかえり とまとめ
	昼食	昼食
		<13:30~15:00>
<14:30~15:00> 受付・チェックイン	<14:00~17:00>	閉会聖餐式
<15:00~15:30> 開会礼拝	セッションⅢのつづき	<15:00> 解散
<15:30~16:30> オリエンテーション		
<16:30~18:00> セッションⅠ 聖書研究の もう一つのあり方 ーバイブルシェアリングー		
夕食	夕食	
<19:30~22:00> セッションⅡ 実際にやってみよう	<19:00~21:30> セッションⅣ 作成したアイデア、 計画の共有	
<22:00~> 就寝前の祈り	<21:30~> 就寝前の祈り	

オリエンテーション

このセッションのねらい

「信徒使徒職リーダーシップ・トレーニング」では、約半年の期間をあけて第2回目を実施しました。従ってこの時間のねらいは、参加者の半年間の歩みを分かち合うこと、その歩みが祝福されつつ、今回のバイブルシェアリングに向けての心の備えをすることです。

このプログラムを単独で行う場合には、参加者が自由に発言できる関係を作るために、第1回のセッション1「仲間づくり」で行ったゲームや、「三つのキーワード」を用いるのも方法でしょう。

以下の導入例は、2回に分けたケースです。

導入例

前回皆さんが集まられてゲームをしたり、教会の現状を話し合ったりしました。そして、各々の現場に戻って行かれました。

今、ここにあるのは顔です。

前回の研修での学びで

1. とてもハッピーだったことは？ (^.^)
2. とても困ってしまったことは？ (+_+)
3. とても悲しかったことは？ (-_-;)
4. 教会の現状を考えて、怒ったことは？ (*_*)
5. 気づいたこと、これはよいと思いついたことは？

前回から今までの半年間の間で、皆さんの気づきを前にはった絵を用いて分かち合ってみましょう。

実施

*一人ひとり、半年間の思いを分かち合う。

まとめ

それぞれが抱えている現場を少し知り合うことができ、とても大事な時間だったと思います。

それでは今からすることを簡単にスケッチします。

1. 耳を大きくして、西原さんからバイブルシェアリングのやり方などを聞きます。
2. 夜には実際にグループで体験してみます。
3. 明日は、自分の教会でどう生かせるかを、グループに別れて話し合って考えます。
4. バイブルシェアリングを自分たちで作成し、夜に各グループが発表、分かち合いをします。
5. 3日目は、今回・前回を含めた全体の分かち合いをします。そして、各々の教会に遣わされていきます...

セッション I 聖書研究のもう一つのあり方

～バイブルシェアリングとは～

このセッションのねらい

このセッションは講義形式になります。私たちにとって聖書とは何だろうか、聖書の物語は私たちにどのように語りかけてくるのだろうか等々、私たちと聖書を巡る様々な事柄について考えます。また、いろいろな聖書の学び方について、簡単にまとめます。

気をつけること

ことに前半部分はちょっと専門的かもしれませんので、十分な準備がいるでしょう。また後半では様々な聖書の学び方について述べますが、これらがダメだという印象を与えないように気をつけてください。

<はじめに>

皆さんは、各々の場ですでにいろいろな形で聖書の学びを実践されているでしょうから、何を今更と思われる方も多いことと思います。また、聖書をこんな形で読むとは言語道断とのご批判をいただくことも予想しています。これはあくまでも一つの提案であって、この形が絶対で決定的であるなどとは考えていません。試行錯誤という道の途上にある者の中間報告です。皆さんが聖書研究会をより豊かなものにされる上で、何らかの参考にしていただければ幸いです。

<私たちにとって聖書とは>

「聖書」は、私たちの信仰生活にとって欠かすことのできない究極の源泉です。真理の泉であり、啓示の書です。私たちの日本聖公会祈祷書の教会問答の第7番は「聖書とは何ですか」となっています。

す。その答えはこうです。「古い契約の民にゆだねられた神のみ言葉を書き記した旧約聖書と、イエス・キリストによって啓示された神の永遠の目的を書き記した新約聖書から成っており、救いに必要なすべてのことがここに記されています。」

「聖書」がいかに私たちの信仰共同体の生に根源的なものかは、聖職按手式において必ず新聖職が聖書を受け取ることに象徴的に表されています。新主教の場合には、司式主教は聖書を手渡ししながら、このように述べます。「聖書を受けなさい。ここに永遠の命のみ言葉が記されています。あなたの道を照らす光として、このみ言葉を受け、世界に宣言しなさい」。新司祭には、「聖書を受けなさい。これはキリストの福音を述べ、聖奠を執行するために、神があなたに与えられた權威のしるしです」となり、新執事に対しては、新約聖書が渡されながら「聖書を受けなさい。これはキリストの福音を宣べ、み言葉に従って神と人ともに仕えるために、神があなたに与えられた權威のしるしです」と語りかけられます。（日本聖公会祈祷書では、司祭の場合は「述べる」で、執事の場合には「宣べる」となっているが何か特別な意味があるのかどうかは分からない。また、アングリカニズムと聖書の有機的連関については、また別項で考えてみたい。）つまり、三聖職位がそれぞれの職務を担うにあたって、聖書が手渡されることが必要条件となっているのです。

したがって、聖書は決して単なる書物ではありません。私たちの信仰と生活の中で、私たちの「受肉」される命に他ならないのです。ヨハネ福音書の降誕物語は、私たちにとって決定的に重要です。「言は肉となって私たちの内に宿られた」（ヨハネ1章14節）。聖書の御言葉が本当に私たちの肉となるために。そのためにこそ、私たちの「聖書研究」は行なわれているのではないのでしょうか。

＜『物語る』ものとしての聖書＞

マルチン・ブーバーは聖書についてこう記しています。

「聖書とは『聴く』ものであって、『読む』ものではない。ヘブライ聖書は生ける『語り』(口伝)の中にこそ起源がある。聖書はそもそもヴォイス(声)であって、書などではない」。

ブーバーのこの聖書(彼はユダヤ教学者であるので、彼が聖書という時にはヘブライ聖書、すなわち私たちが言う旧約聖書を意味する)理解は大変示唆に富んでいます。ブーバーは、数々の聖書翻訳を手がけていますが、彼は、自らの翻訳が実際に声に出して読まれることを求めました。

ヘブライ語を学ばれる方は良くお分かりでしょうが、ヘブライ語には独特な“cola”と呼ばれる「韻」があります。この韻はまさにヘブライ聖書の語りを捉える上での鍵です。この韻こそが、ヘブライ聖書の生き生きとした躍動感溢れる語りを創り上げていると言っても過言ではありません。しかし、残念ながらヘブライ語以外の他言語に翻訳する際にこの韻までもを完全に再生することは不可能に近いのです。ブーバー自身が、そのことを認めています。しかし、彼はローゼンツヴァイクとの共同作業で、ヘブライ聖書をドイツ語に翻訳した際に、この韻を最大限に生かすことに挑戦しているのです。

ここで、その一端をご紹介してみたいのですが、そのドイツ語をさらに日本語に訳すので、これまたダイナミズムを半減させてしまっていることをご了解いただきたいと思います。一例として、創世記第1章3～5節を取り上げてみましょう。私たちの新共同訳聖書はこうです。

神は言われた。「光あれ。」こうして光があった。神は光を見てよしとされた。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。

これが、ブーバー・ローゼンツヴァイク訳ではこうなります。

神は語った。

「光あれ！」

光があった。

神は光を見た。それは良いものであった。

神は光を闇から分けた。

神は光を呼んだ。

「昼よ！」

そして闇を呼んだ。

「夜よ！」

ブーバー・ローゼンツヴァイク訳はその言葉の配置、並びまで配慮がされています。これを書物を読むようにではなく、実際に口に出して語られることを求めたのです。その時、確かに聖書は読まれるものではなく、「聴かれる」物語となるのです。

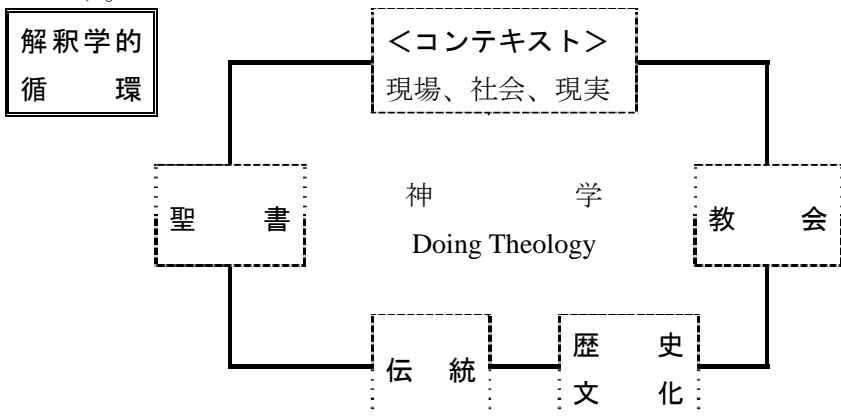
ブーバーにとって、「聖書研究」とは、基本的に文献学や歴史分析の類ではありませんでした。それは、聖書によって現代の今・ここに生きる者がいかなる意味を与えられているのかを明らかにする営みに他なりません。ブーバーは、テキスト（聖書）と読み手がいかに出会うことができるかを模索したのです。その「出会い」とは、いわゆる「我～それ」の出会いではなく、「我～汝（聖書）」という変革的な影響力を持つ出会いであったのです。

<解釈学的循環と聖書>

ブーバーが言うところのテキスト（聖書）と読み手の出会いとは、まさに解釈学の領域の問題であると言えます。解釈学はドイツ語でヘルメノイティクと言いますが、この言葉はギリシャ語のヘルメーネイヤに由来しています。ヘルメーネイヤの本来の意味は、「明ら

かではないものを明らかにする」ことであり、その中にはさらに三つの要素が含まれています。第1に、不明なものを言葉化して理解すること、すなわち「言語化」です。第2に、外国語を自国語に直して明確化すること、すなわち「翻訳」です。第3は、不明な自国語をより理解し得る内容に直すこと、すなわち「釈義」です。

古典ギリシャ時代以降、解釈学は衰退し、再び光が当てられるようになるのは19世紀のシュライエルマッハーやベックからですが、精神科学の方法論として解釈学を確立させたのはディルタイでした。彼にとって、歴史の文献や史料とは「生の表現」であり、必要なことは記号を通して他者の生を<了解>することでありました。<了解>とは、テキストを分かる、もしくは分可らせることですが、了解の対象はあくまでもそのテキストの「意味」です。テキストを理解するためには、テキストが書かれた言語の特質、用法を特定していかねばなりませんし、テキストを生み出した著者や共同体の文化的、歴史的背景も知らなければならないのです。そのような部分部分を理解することを通してテキスト全体の意味を理解すること。こうしたテキスト全体と部分の解釈上の関係を「解釈学的循環」と言います。



この解釈学を基盤とする聖書神学は、バルトの『ロマ書』を端緒に、ブルトマンの非神話化論、実存論的解釈によって推し進められ、さらに神の「言葉」理解に強調点を置いたフックス、エーベリングらに受け継がれています。現代哲学においてはガダマーが、了解とは意味の地平と解釈者の地平が融合した時に起こると提示しました。つまり、テキストを理解するためには、テキストの背景を知るだけでなく、解釈者自身が置かれている文化や前理解なども問題にする必要があるのです。リクールはブルトマンの意図を解釈学的に発展させ、象徴論を用いてテキストを理解しようと試みました。聖書における物語は荒唐無稽な物語ではなく、信仰共同体の根源的経験の象徴表現に他なりません。象徴表現とは、意味の二重性を持つものであり、テキストの字義通りの意味の下には、第2の意味が含まれています。根源的な共同経験を含んでいる象徴表現はまさに意味の母胎であり、テキストの解釈を通してその第2の意味が立ち現れてくるのです。解釈の作業とはテキスト、読み手双方の動的背景を理解し、その上でテキストと読み手の関係の中で意味を解明する行為であると言えます。

リクールらの解釈学的方法論に対しては、聖書根本主義の立場は別にして、聖書の字義通りの意味に集中すべきで、そうしなければイエス・キリストの受難と復活という一回性、固有性が失われるという批判もあります。確かに、イエス・キリストは交換可能な記号では決してありません。私たちの聖書の分かち合いにおいても十分に考慮しなければならない点でしょう。

＜聖書の物語と私・私たちの物語＞

前項では、解釈学における問題点を整理しましたが、かなり分かりづらいものですから、ここではもう少し実際の聖書と私たちの関

係に引きつけて考えてみたいと思います。

聖書を読む時、そのテキストの意味が無前提的に表れてくるわけではありません。まずはその聖書の物語が書かれた背景や状況、言葉にこめられた独特な意味があります。これらのことを理解すること、すなわち「釈義」が必要となるのです。そして、次に読み手、すなわち私の背景や状況、言葉理解、すなわち「前理解」や「コンテキスト」を意識しなければなりません。誰も前理解なしにテキストをレア（生）に読むことは不可能でしょう。日本人、男女、年齢等々の要素はもちろん、自分自身のこれまでの経験や今置かれている状況。そのような前理解を通して聖書のテキストを「読む」のです。複数の人が同じ聖書の箇所を読んだとしても、同じ解釈がなされない可能性が高いのです。否、むしろ全く同じ解釈はあり得ないと言った方が良くも知れません。各人各様、捉え方もまちまちとなるのです。それは、読み手各人の背景が異なるからにはほかなりません。

したがって、聖書を読むということは、「聖書の物語」と「私・私たちの物語」の響き合いであると言えます。「私たちの物語」と「聖書の物語」が豊かに共鳴・共振した時、はじめて聖書の意味がもたらされるのです。聖書～テキスト本文の背景～教会の伝承・伝統～私・私たちの物語～聖書～といった停止することのない断たれることのないの循環において読む中で、常に新たな意味が与えられ、新たな祈りが生まれるのです。この循環には決して終わりがありません。同時に、「今・ここ」という日常、現場の中で聖書を読むことがいかに重要であるかが明確になってきます。逆に考えれば、聖書を分かち合うことを通して、「私」の物語が分かち合われるのです。これを可能ならしめるのが「ファシリテーター」（引き出し役）に他なりません。ある意味ではヘブライ聖書における「預言者」

とは究極のファシリテーターであったと言えるでしょう。「預言者」とは、神の言を預かり、それを同時代の民衆の物語と響かせて、その共鳴の中から現われ出る「意味」を共有させる者だからです。

一方でこれらの作業は、ヘブライ的発想の回復であるとも見ることができます。ギリシャ的思考が、どちらかと言えば物語から具体性、日常性を排除するロゴス化（言葉化・論理化）のプロセス（過程）であるとするなら、ヘブライ的思考は、民に対する神の語り、具体的状況、民の物語、生活の座を基盤とするものです。

このヘブライ的思考に生きていたキリスト者に田中正造を挙げることができるでしょう。足尾鉍毒事件の中で田中正造はコミュニティ（共同体）を破壊された谷中村の民衆解放のため身を献げました。正造が天に召された時、枕元には、谷中の河原の石とマタイ伝が残されていたといわれています。正造は、こう書き記しています。「見よ、神は谷中にあり。聖書は谷中人民の身にあり。」彼にとって、聖書とは書庫の書物ではなく、まさに谷中の民衆の体に受肉された生きた物語でありました。同時代のキリスト教指導者である植村正久は、正造を正統キリスト教から外れた者として痛烈に批判していますが、植村のような神学教育を受けていない正造の方が、むしろ聖書の持つダイナミズムを認識していたと言えるのではないのでしょうか。

ラテン・アメリカのキリスト教基礎共同体では、聖書を分かち合う中で共同体全体の課題、個々人の物語を具体的に共有するという実践が働きの中心となっています。

「聖書は基礎共同体の名刺である。福音は共同体で聴かれ、分かち合われ、信じられる。そしてその事柄に関して、参加者は自分たちの生活の問題を反省する。聖書はいつも生活や共同体の現状に関わっている。聖書の分かち合いの場では、各人に与え

られた事実や状況について語ったり、意見を述べる機会が与えられる。驚くべきことに、この共同体の民衆による聖書の解釈は、初代の教父たちの聖書釈義に実に良く似ている。言葉を越えて、テキストの生ける霊的な意味を捉える解釈なのである。」

(レオナルド・ボフ)

聖書は「研究」する対象などではなく、「分かち合われる」ものだというボフの論述には、このことがはっきりと示されているのです。

＜聖書「研究」にある要素と構造＞

今まで、聖書というものは研究する対象ではなく、分かち合われるものであることを、解釈学的な理解等も含めて考察してきました。そこで、次により具体的な方法について考えてみたいと思います。

一口に聖書研究と言っても、その方法は実に多様です。ハンス・ウェーバーは、厳密に考えれば、聖書研究に必要な要素は二つだけであると言っています。すなわち、第1に「聖書の物語と本文」、第2に「神が聖書を通して伝える事柄によって挑戦、回心、癒し導きを受け入れることのできる人」だと言うのです。逆に言えば、この二つの要素があれば、どのような方法でも良いということになります。それぞれの読み手や交わりの状況や必要に合わせて、聖書の分かち合いの方法は自由に開発されるべきものなのです。したがって、これがベストの聖書研究の方法だと断定することはありえません。この教会の青年会にとって相応しい方法が、別の教会の集会にも適応できるとは限らないのです。以下、いくつかの聖書「研究」のモデルを示しますが、あくまでも例に過ぎないということをお断りしておきます。

いずれの聖書研究においても、基本となる構造は三つです。第1は、「オブザーベーション（観察）」。

その聖書テキストは何について書かれているのかを観察します。
第2は、インタープリテーション（解釈）。

その聖書テキストの意味は何かを解釈します。

第3は、アプリケーション（適用）。

私、あるいは私たちの生活の中でそれをいかに適用できるかを考えます。

この三つの構造が、意識するしないに関わらず含まれているものが聖書研究であると言えるでしょう。

<多様な聖書「研究」の方法>

伝統的に様々な聖書研究の方法が試みられ、実践されてきました。ここではその中からいくつか特徴的なものを例示してみたいと思います。

(1) 「講義型聖書研究」

これはごく一般的な聖書研究の方法です。牧師や講師による聖書の説き明かしを聞くことが中心となります。再度強調しておきたいのですが、このタイプの聖書研究が間違っているわけではありません。聖書の文献批評的、歴史学的、解釈学的方法論を援用した聖書の深い釈義に学ぶことは時に大変重要なことです。また、講師の釈義を聞いた後に、質疑応答だけではなく、さらに小分団に分かれて分かち合う等の工夫をすれば、十分なバイブル・シェアリングとなるでしょう。

またどのような場、あるいは現場で話を聞くかによってもその意味がさらに生きてくることがあります。京都にある在日韓国朝鮮人民衆の多住地域である東九条では、エキキュメンカルな形ですでに10年以上にわたって青年を対象とした現場研修が毎夏開催されています。この研修では毎回、講義型の聖書研究を

プログラムに入れ、そのことを通して現場での経験と聖書の使信の切り結びを試みており、大きな成果をあげています。

(2) 「ABC型聖書研究」

これも有名な聖書研究の方法です。

A : Analysis (分析)

選ばれた聖書テキストのそれぞれの段落にタイトルをつけます。さらに、その物語全体にタイトルをつけます。

B : Best Verse (鍵となる節)

その物語のテーマを要約しているような節を取り出してみます。さらにその箇所を記憶に留めます。

C : Contract (神との契約)

この物語が、自分の生活の中でどのように響くのか、どのような示唆、あるいは決意が与えられたかを紙に書き出してみます。

この聖書研究の方法は、基本的には個人で行なうために考えられたものですが、この作業をワークショップ的なものにアレンジすることによって、豊かなバイブル・シェアリングとなります。

(3) 「文献批評型聖書研究」

聖書の背景を特に深く学ぶことによって、その聖書テキストが本来持つテーマに迫ろうとするものです。

その聖書の物語（テキスト）全体が良く納得できるようになるまで、それぞれの節、箇所を丁寧に分析してみます。その際には、聖書大辞典やコンコルダンス(聖書語句辞典)等をフルに活用します。5W1H (Who, What, Where, When, Why, How) の問いをどの箇所にも投げかけてみます。

これも個人で行うのに適していますが、大きな模造紙に表を書

きながらグループごとに分析を加えるのも大変面白い結果となります。聖書の文献批評は何も聖書学の専門家や牧師だけのものではないのです。

(4) 「テーマ型聖書研究」

聖書全体を、ある特定のテーマやコンセプト（概念・考え方）を軸に読み込んでいくものです。

例えば、すべての福音書を通して、「祈り」というものがどのように位置づけられているかを検討します。すると、イエスは何か大きな行ないや決断をされる前に、常にお一人で祈られていることに改めて気づく、といった形です。その他、「赦し」「犠牲」「愛」「正義」「苦しみ」「平和」等々、主題は、そのグループや状況、世代等に応じて自由に選択することができます。

これには、コンコルダンスや聖書辞典は欠かせません。

(5) 「登場人物型聖書研究」

一人の登場人物に焦点を当て、その人の人生や生きざまに迫るものです。

例えば、バルナバやプリスカなどから始めてみて、ペテロやパウロ、イエスの母マリア、マグダラのマリアなどに取り組んでいくのも面白いでしょう。

この方法では、聖書の行間や書かれてはいないことに思いを馳せてみることもあります。バルナバはパウロと別れてからマルコと共にキプロス島に渡りますが、その後のバルナバの足取りは聖書には記されていません。そこで、もしかするとパウロとは対照的に、無名の小さな村々の無名な人々と共に生きようとしたであろうバルナバの宣教旅行を思い描いてみる、といった具合です。

最終的にはグループごとに劇に仕上げ、演じ合うことも楽しい

ワークショップとなるでしょう。

(6) 「単語型聖書研究」

一つの単語にこだわって、それが聖書全体の中でどのように使われているか、またその単語が本来持つ意味は何かを調べます。テーマ型聖書研究に近いのですが、ギリシャ語原典からあたってみるとより効果的でしょう。ギリシャ語の知識がなくても、最近ではギリシャ語原典の各単語に文法的な用法と日本語の訳語を併記した便利なものが出されているので利用すると良いと思います。

福音書で用いられる「憐れむ」という言葉が、ギリシャ語では「スプランクニゾマイ」と言い、「はらわたを痛める」というような意味であることを知ると、イエスの福音理解もまた違ったものになるのではないのでしょうか。釈義書には書かれていない、新たな意味が浮かび上がってくることもあります。

(7) 「写本型聖書研究」

これは一風変わっていますが、文字通り選ばれた物語を章、節は省いてそのまま書き写してみる、というものです。そして、前述した、観察、解釈、適用の手順を踏み、理解を深めていきます。物語をいくつかの段落に分けて、一かたまりで考えるのも良いでしょう。印刷技術が発明されるまでは、聖書はこのようにして写本されていました。そのことを追体験すると同時に、聖書の言葉、一つひとつに丁寧に向かうことによって与えられるものは大きいと思います。

基本的に個人の作業であり、時間的な問題もあるので、グループワークには向きませんが、例えばマルコによる福音書を参加者全員で分担して写本してみる、ということも不可能ではありません。

以上、いくつかの聖書研究の方法を紹介しましたが、これらはごく一部です。各教会で独自の実践されている方法もあると思います。聖書研究の多様な方法を共にシェアし合うことも確かに大切なことでしょう。

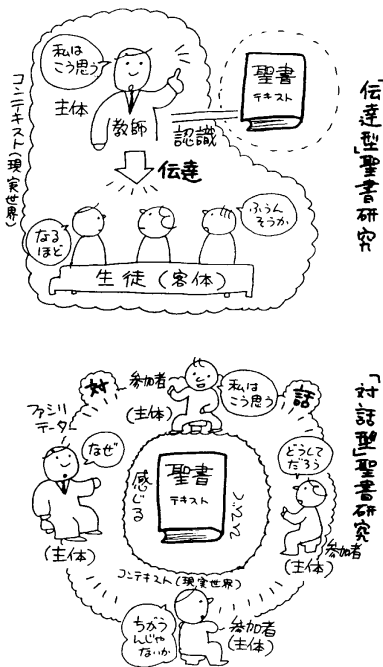
＜「バイブル・シェアリング」とは？＞

少し繰り返しになりますが、バイブル・シェアリングは、「聖書の分かち合い」および「聖書を通じた分かち合い」の二つの意味を含んでいます。聖書を「研究する」というよりも、聖書と出会い、聖書（テキスト）を私たちの置かれている現場・状況（コンテキスト）のなかでとらえます。そして、「私たちの物語」が、「聖書の物語」

とどのように共鳴、共振しているか、どういう意味を持っているかなどをグループで分かち合います。聖書のみ言葉・物語（テキスト）から私たちの現場・状況（コンテキスト）をみつめ、そしてまた聖書にもどる。この繰り返す過程のなかで、「聖書の物語」と「私たちの物語」が重ね合わさり、響き合っていくのです。

（絵-9 参照）

このように、バイブル・シェアリングは、現代に生きる私たちにとって聖書は如何なる意味を持っているのかを探り、イエスから遣わされた者として生きる生き方を考える協働作業である、と言えるでしょう。



絵-9

ファシリテーターは、そうしたことが可能になるような場と関係を作ります。自らも聖書に出会い、学びながら。

こうしたやり方・考え方は、パウロ・フレイレの教育思想に基づいてカトリックの信徒グループがラテン・アメリカで実践した「キリスト教基礎共同体づくり」(BCC-CO)のなかで発展してきました。レオナルド・ボフは、「福音は共同体で聴かれ、分かち合われ、信じられる。そしてその事柄に関して、参加者は自分たちの生活の問題を振り返る。聖書は、いつも生活や共同体の現状に関わっている。聖書の分かち合いの場では、各人はそれぞれの事実や状況について語ったり、意見を述べる機会が与えられる。驚くべきことに、この共同体の民衆による聖書の解釈は、初代の教父たちの聖書釈義に実に良く似ている。」と述べています。

セッションⅡ <実際にやってみよう>

まず、バイブル・シェアリングを行う聖書の箇所ですが、基本的には福音書の物語を中心に選びました。もちろん書簡やヘブライ聖書（旧約聖書）の物語を読んでも意味のある分かち合いとなると思います。ここではリーダーシップ・トレーニングで実際に行われたものに従って記してみます。用いた箇所はルカによる福音書 10 章 38～42 節の「マルタとマリア」の話です。

歌

最初に歌を歌いました。この時はテゼの短い歌を繰り返し歌いましたが、初めに心を合わせて聖歌を歌うこと等を通して、御言葉と出会う備えをすることは非常に重要であると思います。

聖書のテキストの朗読

普通にどなたかお一人に朗読していただいても良いのですが、参加者の参加度を高めるためにも一人 1 節ずつ、テキストを 2 回輪読する方法を取りました。今回は、さらに様々な聖書訳、言語で同じテキストを読んでみましたが、これだけでも新鮮な発見があります。実際にここで新共同訳以外に用いた聖書は、新改訳聖書、フランシスコ会訳、聖福音書（1897 年カトリック訳）、TEV（Today's English Version）、韓国語聖書、ギリシャ語聖書、ギリシャ語逐語訳、琉球語（ベッテルハイム訳、参加者の沖縄教区棚原司祭が急遽取り寄せて下さった）です。これらの聖書のほとんどは、会場の名古屋カトリック研修センターの図書室からお借りしたのですが、毎回、当該箇所の新共同訳は抜き刷りし、裏にはギリシャ語原語と逐語訳をコピーしたものを用意しています。

以下に、幾つかの聖書を並べてみましょう。

<p>聖書協会訳(1955年)</p>	<p>38 一同が旅を続けているうちに、イエスがある村へはいられた。するとマルタという名の女がイエスを家に迎え入れた。³⁹ この女にマリヤという妹がいたが、主の足もとにすわって、御言に聞き入っていた。⁴⁰ ところが、マルタは接待のことで忙がしくて心をとらみだし、イエスのところにきて言った、「主よ、妹がわたしだけに接待をさせているのを、なんともお思いになりませんか。わたしの手伝いをするように妹におっしゃってください」。⁴¹ 主は答えて言われた、「マルタよ、マルタよ、あなたは多くのことに心を配って思いわずらっている。 ⁴² しかし、無くてならぬものは多くはない。いや、一つだけである。マリヤはその良い方を選んだのだ。そしてそれは、彼女から取り去ってはならないものである」。</p>
<p>新改訳聖書</p>	<p>38 さて、彼らが旅を続けているうち、イエスがある村にはいられると、マルタという女が喜んで家にお迎えした。³⁹ 彼女にマリヤという妹がいたが、主の足もとにすわって、みことばに聞き入っていた。⁴⁰ ところが、マルタは、いろいろもてなしのために気が落ち着かず、みもとに来て言った。「主よ。妹が私だけにおもてなしをさせているのを、何ともお思いにならないのでしょうか。私の手伝いをするように、妹におっしゃってください。」⁴¹ 主は答えて言われた。「マルタ、マルタ。あなたは、いろいろなことを心配して、気を使っています。⁴² しかし、どうしても必要なことはわずかです。いや、一つだけです。マリヤはその良いほうを選んだのです。彼女からそれを取り上げてはいけません。」</p>
<p>新共同訳(1987年)</p>	<p>38 一行が歩いて行くうち、イエスはある村にお入りになった。すると、マルタという女が、イエスを家に迎え入れた。³⁹ 彼女にはマリアという姉妹がいた。マリアは主の足もとに座って、その話に聞き入っていた。⁴⁰ マルタは、いろいろもてなしのためせわしく立ち働いていたが、そばに近寄って言った。「主よ、わたしの姉妹はわたしだけにもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください。」⁴¹ 主はお答えになった。「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。⁴² しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない。」</p>

<p style="text-align: center;">T E V</p>	<p>38 As Jesus and his disciples went on their way, he came to a village where a woman named Martha welcomed him in her home. 39 She had a sister named Mary, who sat down at the feet of the Lord and listened to his teaching. 40 Martha was upset over all the work she had to do, so she came and said, "Lord, don't you care that my sister has left me to do all the work by myself? Tell her to come and help me!" 41 The Lord answered her, "Martha, Martha! You are worried and troubled over so many things, 42 but just one is needed. Mary has chosen the right thing, and it will not be taken away from her."</p>
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">ギリシヤ語聖書(ギリシヤ語の下がよみ)</p>	<p>38 Ἐν δὲ τῷ πορεύεσθαι αὐτοὺς αὐτὸς εἰσῆλθεν εἰς エン デ トオ ポレウエスタイ アウトゥース アウトス エイセールテン エイス κώμην τινά· γυνὴ δὲ τις ὀνόματι Μάρθα ὑπεδέξατο コーメーン ティナ グネー デ ティス オノマティ マルタ フュベデクサト αὐτόν. 39 καὶ τῆδε ἦν ἀδελφὴ καλουμένη Μαρίας, アウトン. カイ テーデ エン アデルフェー カロウメネー マリアム, (ἡ) καὶ παρακαθεσθῆῖσα πρὸς τοὺς πόδας τοῦ κυρίου へー カイ パラカテステイサ プロス トゥース ポダス トゥ キュリウー ἤκουεν τὸν λόγον αὐτοῦ. 40 ἡ δὲ Μάρθα περιεσπάτο` エ-コウエン トン ログン アウトウー へ-デ マルタ ペリエスパト περι πολλὴν διακονίαν· ἐπιστάσα δὲ εἶπεν, Κύριε, οὐ ペリ ポレーン ディアコニアン エピスタサ デ Эйпен Кюлие, Оу μέλει σοι ὅτι ἡ ἀδελφὴ μου μόνην με κατέλιπεν メレイ ソイ ホティ へ-アデルフェー モウ モネーン メ カテリベン διακονεῖν; εἶπε οὖν αὐτῇ ἵνα μοι συναντιλάβηται. デアコネイン; Эйбе Оуэн Ауतेー ヒナ Мой Снантйлаβэтай. 41 ἀποκριθεὶς δὲ εἶπεν αὐτῇ ὁ κύριος, Μάρθα Μάρθα, Αποκριτεϊς デ Эйпен Ауतेー ホ クリオス, マルタ マルタ, μεριμνᾶς καὶ θορυβάζῃ περὶ πολλά, 42 ἐνὸς δὲ ἐστὶν メリムナス カイ タルバゼー ペリ ポラ, へノス デ エスティン χρεια· Μαρίας γὰρ τὴν ἀγαθὴν μερίδα ἐξελέξατο ἥτις クレイア マリアム ガル テーン アガテーン メリダ エクセλεκサト へーティス οὐκ ἀφαιρεθήσεται αὐτῆς. オウク アファイレテセタイ Ауतेース.</p>

聖書テキストの背景・言葉の説明

聖書を朗読した後、聖書テキストの背景や、言葉の説明を行ないます。黙想の助けとなる最小限の解説を、簡単にまとめてレジюмеにして配ると良いでしょう。以下はそのレジюмеの例です。

<38 節>

「一行が歩いて行くうち」＝この物語はイエス一行がエルサレムへと向かう道中の出来事。

「迎え入れた」＝大切な客人以外には用いない。

<39 節>

「マリア」＝マグダラのマリアとは別人。

「主の足もとに座って」＝先生（ラビ）の話に聞き入る弟子がする行為。しかし、女性がラビの弟子となることはなかった。

「聞き入っていた」＝中断することなく聞き続けたという意味。

(未完了過去形)

<40 節>

「立ち働いていた」＝中断することなく働き続けていたという意味。

(未完了過去形)

「もてなし」＝仕えること（ディアコニア）。給仕、あるいはその他多くの奉仕。当時の社会常識では給仕は女性の仕事であった。

<41 節>

「マルタ、マルタ」＝イエスが繰り返し誰かを呼ぶのは、この場面以外では、ペテロとサウロ（パウロ）だけ。

「思い悩み」＝心配すること、もしくは肯定的には関心を持つこと。

<42 節>

「良い」＝セム語的言い方で、二つの、あるいは多くのもののなかで「良いもの」の意味であって、「より良い」「一番良い」の意味。

「各自の黙想」

ひとりで聖書テキストに聴く黙想の時を持ちます。誰とも話をせずに、自分の好きな場所で。自分のなかで何回も繰り返し読み、み言葉に聴き入ります。シェアリングをするためには、この個人の黙想は欠かせません。「私」と「聖書の物語」の出会いが起らなければ、分かち合いも有り得ないからです。時間は30分ぐらいでしょうか。ただ第3期トレーニングでは、この個人黙想に約1時間近くかけました。意外に普段の生活の中では、一つの聖書箇所と向き合うためにこれだけの時間を集中することはないものです。

黙想に入る前に、ファシリテーターはいくつかの注意点を伝えます。各参加者にA4の画用紙と太めのペンを渡して、黙想の最後に自分にとってのキーワード、気になった節、単語、気づいたこと、感じたことをその画用紙に書いてもらいます。それは、黙想後にグループに分かれてシェアリングをする時の助けとなるものです。

中には、一人で黙想することに戸惑われる方もおられるかも知れません。黙想のヒントという意味で、「いくつかの問い」を用意しておくと思います。これは、これらの問いに答えなければならないというものではなく、用いても良いし用いなくても良いのです。

例えば、次のような簡単な問いです。

*あなたがこの物語に登場するとすれば誰でしょうか？

(マルタですか？マリアですか？あるいは二人をみているイエスの弟子たちですか？)

*イエスにとっての<もてなし>とは、どういうことなのでしょう
か？

- *「必要なことはただ一つだけである」とは何のことでしょうか？
- *イエスにとってマルタとはどのような存在なのでしょう？
また、マルタにとってイエスとはどのような存在なのでしょう？
- *この物語に副題をつけるとすれば、どのようになるのでしょうか？
- *この物語からあなたが、あるいは私たちの教会が受けるメッセージは何でしょうか？

こうした問いの一つに応答してみることを通して、黙想の時を過ごすこともできます。場合によっては、聖書には書かれていないマルタのその後を思いめぐらしてみることが可能でしょう。

この個人黙想の時間における一つの約束事は、黙想に入ったら誰とも話をしないこと。

沈黙の中で聖書の物語に沈潜することです。

「小グループでの分かち合い」

黙想が終われば、各グループに分かれます。1グループの人数は10人を越えないようにします。5～6人が適当でしょう。それぞれのグループで、ファシリテーターと、全体での分かち合いで報告をする方を決め、約1時間、参加者は黙想の間にキーワードを記した画用紙を皆に見せながら自分自身の思いめぐらしを分かち合います。このシェアリングは本当に豊かな時です。自分が思いもつかなかった聖書との出会いがあることを発見し、また参加者一人ひとりが日々担っている重荷や痛み、あるいは喜びに気づかされていきます。

各グループで分かち合われた内容は多岐にわたりました。一人ひとりの生き方が出されました。そのうちのいくつかを紹介します。

- * 「教会にいとホストになってしまうが、自分も主の食卓に招かれている。」
- * 「イエスはマルタを叱責したのではなく、マルタと顔と顔を合わせて語り合いたかった。」
- * 「イエスにとってのもてなしとは顔と顔を合わせて出会うことであった。」
- * 「イエスの『マルタ、マルタ、・・・』という呼びかけは、そのまま今の自分への呼びかけに聞こえる。聖書を読むというのではなく、み言葉に聴き入る気持ちで黙想した時、聖書が私に語りかけているという体験を得た。」
- * 「私にとって鍵となる言葉は『その話に聞き入っていた』という箇所。何回もこの箇所を読み返すと、私は世の中の慣習に流されそうになり、いつも揺れ動く自分の姿をみる。マリアのように、ただイエスを見上げてひたすらその話に聴き入りたい…。」
- * 「今までこの聖書の箇所は良い方を選んだマリアが中心でそのことの意味をずっと考えていた。しかし、今日、こうして黙想と分かち合いをしてみて、実はこの物語は『イエスとマルタとの対話の物語』または『イエスとマルタの関係の物語』でもあることに気づいた。イエスを家に迎え入れたマルタ、イエスに語りかけたマルタ、イエスに声を挙げて質問したマルタ…。それに応答したイエス、マルタと対話したイエス。これはイエスとマルタの出会いと対話の物語だ。」
- * 「ただ一つ必要なこと、良い方、取り上げてはならないもの、それは主の足もとに座るということ。つまり、主と共に在るということ、主の声に聴き入るということ。それはすなわち、イエスに従う生き方(生かされ方)をするということだ。」

ザアカイの物語を分かち合った時にはこう
いう応答がありました。

*ザアカイが木に登らなければならな
かったのは、誰一人として背の低い
彼を前の方に導いてあげなかったか
ら。

私たちの教会もそうした群衆になっ
ていないか。

*ザアカイと名前と呼ばれることの
感激。あなたこそ大切な人なのだ。
主に招かれている人なのだ。

*わたしはいちじく桑の木。木はず
っとそのまま、なんにもしゃべ
らないけれど、この木がなければ
ザアカイさんとイエスさまは出会
うことができなかった。わたしは、
そんな木になりたい。

バイブル・シェア
リングの貴重さは
ここにあります。準
備する者、リードす
る者が決して思い
もつかなかった聖
書との出会いが生
まれるのです。教え
る側、学ぶ側という
区分けはそこには
一切なく、すべての
者が与える者とな
り、また与えられる
者となるのですか
ら。

⑥「全体での分かち合い」（30分）

グループでのシェアリングが終わったら、再び全体で集まり、各グループごとに全体での分かち合いをします。グループの各メンバーが書いた画用紙をボードに貼って、それを皆で見ながら報告者が分かち合いの中で印象に残ったことを伝えます。その際に全体のファシリテーターは、その一つ一つに含まれている室のような普遍的な質を最大限に引き出すように努めましょう。結論や「正解」はありません。神学的に正しい解釈かどうかは問題なのではありません。聖書の箇所（テキスト）が一人一人の心にどう響いたか、そこで何を感じたかが大切なのです。

最後に、ファシリテーターがエヴァリュエーション（評価を通

して意味を与える)をします。必要があれば、補足的材料の提示や、何故この聖書の個所を選んだか、などを説明があってもよいでしょう。最後に、歌を歌ってプログラムを終わります。

全体で約3時間のプログラムですが、それでも時間が足りない位でした。従って、どちらかと言えば、黙想会や、教会キャンプなどの際に相応しいものかも知れませんが、普段の主日の礼拝後に行なう場合でも、工夫次第で十分に応用できると思います。

生きている主と出会うために、私たちは聖書を分かち合います。そこには、生きている主の、生きているあなたの、そして生きている私の物語があります。そこから私たちの祈りもまた生まれてくるのです。

<時間の配分> (リーダーシップ・トレーニングで行われたもの)

歌	(5分)
聖書のテキストの朗読	(15分)
聖書テキストの背景・言葉の説明	(10分)
各自の黙想	(30～60分)
小グループでの分かち合い	(60～70分)
全体での分かち合い	(30分)

セッションⅢ (バイブルシェアリングの実際)

この1日は、与えられたテキストをもとに、参加者が自分たちでバイブル・シェアリングを行い、引続いて実際の場、教会や黙想会、婦人会、青年会、日曜学校などで応用できるバイブル・シェアリングを開発しました。

セッションⅣ（作成したアイデア、計画の共有）

セッションⅣでは、このようにして各グループで開発したバイブル・シェアリングを、他の参加者を対象に行ってみました。

参加者が開発したバイブル・シェアリング

ここでは、参加者が開発したバイブル・シェアリングをいくつか、参考までに紹介してみましよう。

参考例 1 「民衆演劇」とバイブル・シェアリング

使用テキスト：ルカによる福音書第4章14～21節

テキストを参加者が何回も輪読する。

各自の黙想

劇を見ることをとおして、一緒に考えていく。

場面Ⅰ「2700年前・・・」

預言者イザヤがゆっくりとあらわれる。太く低い声で、「主の霊がわたしの上におられる」で始まるイザヤ書第61章1～4節に書かれている個所を「預言」として語りかける。

＜劇を見ている者（観客）、その荘重さに一同シーンとなる。＞
そして退場。

場面Ⅱ「2000年前・・・」

ナレーターの女性、あらわれる。やはりゆっくりしたやさしい声で、救い主イエスの誕生物語を読む。

そして、退場。

場面Ⅲ「それから30年後・・・」

イエス登場。目を輝かせて張りのある声で、イザヤ書を観客に向かって語りかけるように、呼びかけるように読む。

イエスの後ろには「主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために」と大きく書かれた紙が掲げられている。

そして、退場。

場面Ⅳ「そして 1998 年……」

最後に、今ここにいる私たちの仲間の一人であるメンバーが同じイザヤ書を読む。ゆっくりと、考えながら。分かりにくい個所にひっかかりながら……。何かブツブツと日常生活のことと照らし合わせながら読む。

そして劇に引き込まれるようにして観ている私たち（観客だと思っている私たち）に、その人はやさしい声で「あなたはどう思いますか？ これ、どう感じますか？」と語りかける。

場面Ⅳの最後になされた観客への語りかけ、呼びかけをきっかけとして、今度は全体での分かち合いへとつながっていきます。

*この劇に関しては、参考資料「アウグスト・ボアールの民衆演劇の思想と実践から学ぶ」の中に、池住さんの解説付で同じものが収録されています。

参考例 2 群 読

使用テキスト：マルコによる福音書第1章14～20節

導入の言葉：今日は目からは言ってくる言葉ではなく、耳から入ってくる神様の言葉を聞いてみたいと思います。
始めにお祈りをします。(祈り)

賛美の歌：「主よ、わたしはここにおります。どうぞお話ください。」

マルコによる福音書1章14節から、1節ずつ輪読してみましよう。

(輪読する)

今、各々が読んだ節を、15分ぐらいかけて暗唱してください。

20節はみんなで暗唱します。(順番に1節ずつ暗唱する。)

次は、各々の暗唱に続いて、唱えてください。適当に区切って読みます。(少しずつ、先唱者に従って、全員で群読する。)

今度は、途中を区切らずに、1節ずつ読んでみましよう。

(先唱者が1節暗唱した後、全員で1節ずつ群読する。)

今度は、皆さんと一緒に暗唱してみたいと思います。

(全員で、テキストを通して群読する。)

しばらく沈黙する。

⑦ファシリテーターに従って全員で2回目・3回目の群読をする。

集会の最後のお祈り

参考例 3 イエスの出来事は「事件」。ワイドショー形式

使用テキスト：マルコによる福音書第1章14～20節

テキストを参加者が何回も輪読する。

各自の黙想

ワイドショー劇を見ることをとおして、一緒に考えていく。

ワイドショーのあらすじ

キャスター：皆さん、こんばんは。「事件のシェアリング」の時間です。イスラエル北部のガリラヤ湖で、4人の若者が失踪するという事件が起きました。

昨日の早朝、ガリラヤ湖で漁をしていたシモンさん(30才)、弟のアンデレさん(28才)、それからヨハネさんとヤコブさんいずれも29才の4人が、ナザレ村からやってきたイエスという30才ぐらいの男性に声をかけられるや否や、すぐに後をついて行ってしまったということです。

今、現場に中村リポーターが行っています。

中村さん、中村さん、そちらのようすはいかがですか？

リポーター：はい、中村です。(ガリラヤ湖の状況—漁業の村等—を簡単に説明した後、両親のゼベダイとその妻にインタビューする。)

①ゼベダイに——ついて行ってしまった時の状況。制止しなかったのか、その理由。

②妻に——子どもがいなくなった、今の気持ち。

(気持ちを述べた後、妻は制止しなかった夫をなじる。夫はそれに弁解した。)

ちょっと変なことになってきました。こちらはそんな状況です。それでは1度マイクをスタジオにお返しします。

キャスター：スタジオです。ありがとうございました。どうもこのイエスという男が事件の鍵をにぎっていると思われま

す。今スタジオに、この方面の権威者である、エルサレム大学の小野寺教授にお越しいただいております。

小野寺先生、この事件をどんな事件と見ておられますか？

小野寺教授：(フリップを使って時代背景の説明をする。)

①ローマ帝国の占領下。②救世主待望。③洗礼者ヨハネの出現。④ヨハネ出現に伴うメシア来臨への期待。

キャスター：しかし、実際には4人の若者がついて行ってしまったわけですが、先生はこのイエスについて何かご存知でしょうか？

小野寺教授：(フリップを使って説明をする。)

①権威の下にある自分としては認めがたい。②その理由として「イエスはどこで学んだのか?」「ガリラヤから何か良いものがでるだろうか?」③分派だと考えられるが、あまり情報はない。

キャスター：以上のような先生のお話ですが。

中村さん、現場では、ご両親以外の方々はこの事件をどのように受け止められているのでしょうか？

リポーター：はい、中村です。

今こちらには失踪されたシモンさんの奥様と、シモンさん・アンデレさんの友人の方に来ていただいております。

①シモンの妻に——今の気持ちはどうか。なぜついて行ってしまったと思うか。イエスについて

何か聞いたことがあるか。訴えたいこと。

②友人に——もしイエスから声をかけられたとしたら、あなたならどうするか？

現場では残されたご家族の方の悲しみ・困惑がある一方で、イエスへの期待の声も聞かれるようです。

キャスター：はい、ありがとうございます。今のシモンさんの奥さんと友人の方のお話ですが、先生、こんなに簡単について行けるものなんではないでしょうか？

小野寺教授：わかりません。しかし私としては許しがたい事件だと思います。

キャスター：小野寺先生にも理解できない、全く不可解な事件のようです。

それにしても彼らは、なぜ、あんなに簡単についていったのでしょうか？

テレビをご覧の皆さんは、どうお考えになりますでしょうか？

以上で、「事件のシェアリング」の時間を終わります。

最後になされたキャスターの観客への語りかけ、呼びかけをきっかけとして、今度は全体での分かち合いへとつながっていきます。

セッションV（全体のふりかえりとまとめ）

このセッションのねらい

このセッションは、第1回と今回のトレーニングをとおしてのふりかえりをします。

準備するもの

各自、紙と鉛筆

導入例

*参加型学習とは、参加をしない自由もあります。いやなことがあって、涙することがあって、気分が乗らない時があるかもしれません。そんな時に「みなさん、…をしましょう」とやると、参加型学習の名の「強制の教育」・「抑圧の教育」になってしまうことに気をつけましょう。

*テーブルの上には、紙と鉛筆だけ用意してください。

*その時の気持ち、テンション、出会い、言葉を大切にしたいと思います。

*①自分のグループ以外のことで気づいた、

②自分のグループ以外のことから与えられた、

印象に残っている・心に響いた、感じた・心に突き刺さった・心が揺り動かされた、内容、言葉、方法、プロセスを、一人になってメモ（具体的であればあるほどよい）します。

*言い換えると

あなたのグループの（…………）について、私はこう感じた、
こう思い（願いました）。⇒他のグループへの応答（Response）

②あなたのグループの（…………）は、私にとってこういう意味
がありました。⇒他のグループとの対話（Dialogue）

実 施

一人でメモする（10分）

メモを見て、もう一度確認する。

グループで分かち合う

分かち合ったものを模造紙に書き出す（③+④で20分）

各自で張り出されたものを黙読する

全体で分かち合う

全体での分ち合い

*壁に張られた他のグループからの応答を読んでどうですか。

各グループから2～3人ずつ一言お願いします。

全体まとめーファシリテーターから

*この研修を通して、私たちは

①発見・対話はすばらしい。

②自分の発言などへの応答があった時の嬉しさ、なかったときの寂しさ。

ということに気づかされました。これは人間関係を深めていくときに大切なものではないでしょうか。

*その意味でファシリテーターは、参加者の状況に応じて、発見・対話を促すために

「他の方、どう思いました？」

「あなたならどうしますか？」

「イエス様なら、どうするでしょうか？」

と言った質問を投げかけることも大切でしょう。

*このような発見・対話を促す働きにエヴァリュエーションとフィード・バックがあります。

*エヴァリエーション (Evaluation : 評価)

エヴァリエーション (評価) は査定ではありません。Evaluation の E は「外へ」、valuatio は「価値」という意味で、エヴァリエーションするということは、「価値を見出す、学びの再発見・再発掘する」ということです。すべての人が持っている豊かなものを引き出すのが教育であり、それを引き出す促し役がファシリテーターなのですから。

*フィードバック (Feed Back)

「餌を与える」ことを英語で Feed (フィード) と言います。親鳥が雛に餌を与えるときは、かみ砕いて与えます。雛鳥がそれでも固い時はもどしてきます。つまりかみ砕いたものを戻すことが (Feed Back) なのです。

Feed Back はできるだけ受け止められるようなものにしようと努めるのですが、そうでない場合もありえるでしょう。しかし受け止められないような Feed Back は互いの距離を大きくしてしまいます。また、Feed Back に対する防衛、正当化を避けるようにします。

礼拝・祈りについて

このトレーニングでは、教会の他の集いと同様、祈りをもって1日を始め、祈りをもって1日を終わります。そこで用いられる祈りは祈禱書はもちろん、スタッフが予め準備した式文を用いて行われました。ここではその中からいくつかをご紹介します。参考になれば幸いです。

なお、聖歌・聖書の箇所は適切ものを用いられるとよいと思います。

開 会 礼 拝

第1回目の開会礼拝は、祈禱書の夕の礼拝か夕の祈りを用いました。しかし、第2回目の開会礼拝は、第1回のトレーニングを終了して散らされた者が再び集められたことを思い、92頁以下のような式文を作成して用いました。

開 会 礼 拝

使用上の注意

参加者は円形になって座る。

司式者の前の番号は、この礼拝の担当スタッフを1とし、その後右回り、または左回りに司式者が交代していくことを示す。

聖堂で行う場合には、あらかじめ順番を指示しておくとうい。

詩編の部分は、4番目の司式者を正面にし、会衆の方から司式者を見て自分の位置が司式者の右側か左側かを判断する。

メッセージは、担当者をあらかじめ決めておく。

聖歌は他の適当なものを用いてもよい。

一同立つ。

古今聖歌集増補版'95 第26番 (主よ、あなたの火のような)

- 1 司式者 私たちを、再びお集めくださった主よ、
会 衆 この集いのうちにおいでください
- 2 司式者 弟子たちの中に立ち、復活のみ姿を現され、全世界に
派遣された主よ、
会 衆 私たちにもお臨みください
- 3 司式者 栄光は、父と子と聖霊に
会 衆 初めのように、今も、世々に限りなく アーメン

詩 編 103編 (新共同訳聖書より)

- 4 司式者 わたしの魂よ、主をたたえよ || わたしの内にあるも
のはこそって、聖なる御名をたたえよ
会衆右 わたしの魂よ、主をたたえよ || 主の御計らいを何ひとつ
つ忘れてはならない

- 会衆左 主はお前の罪をことごとく赦し || 病をすべて癒し
会衆右 命を墓から贖い出してくださる || 慈しみと憐れみの冠
を授け
- 会衆左 長らえる限り良いものに満ち足らせ || 驚のような若さ
を新たにしてくださる
会衆右 主はすべて虐げられている人のために || 恵みの御業と
裁きを行われる
- 会衆左 主は御自分の道をモーセに || 御業をイスラエルの子ら
に示された
会衆右 主は憐れみ深く、恵みに富み || 忍耐強く、慈しみは大き
い
- 会衆左 永久に責めることはなく || とこしえに怒り続けられる
ことはない
会衆右 主は私たちを、罪に応じてあしらわれることなく ||
私たちの悪に従って報いられることもない
- 会衆左 天が地を超えて高いように || 慈しみは主を畏れる人を
超えて大きい
会衆右 東が西から遠い程 || 私たちの背きの罪を遠ざけて
くださる。
- 会衆左 父がその子を憐れむように || 主は主を畏れる人を憐れ
んでくださる
会衆右 主は私たちを、どのように造るべきか知っておられ
た || 私たちが塵にすぎないことを、御心に留めて
おられる
- 会衆左 人の生涯は草のよう || 野の花のように咲く
会衆右 風がその上に吹けば、消えうせ || 生えていた所を知る
者もなくなる

- 会衆左 主の慈しみは世々としえに、主を畏れる人の上にあ
り || 恵みの御業は子らの子らに
- 会衆右 主の契約を守る人 || 命令を心に留めて行う人に及ぶ
- 会衆左 主は天に御座を固く据え || 主権をもってすべてを統治
される
- 会衆右 御使いたちよ、主をたたえよ || 主の語られる声を聞き、
御言葉を成し遂げるものよ、力ある勇士たちよ。
- 会衆左 主の万軍よ、主をたたえよ || 御もとに仕え、御旨を果
たすものよ
- 会衆右 主に造られたものはすべて、主をたたえよ || 主の統治
されるところの、どこにあっても。わたしの魂よ、主を
たたえよ
- 一 同 栄光は || 父と子と聖霊に
初めのように、今も || 世々に限りなく アーメン

聖書朗読

- 5 司式者 ローマの信徒への手紙第1章1節以下に記された、
聖書のみ言葉を聞きましょう。

会衆は着席する。

- 6 朗読者 キリスト・イエスの僕、神の福音のために選び出され、
召されて使徒となったパウロから、——この福音は、
神が既に聖書の中で預言者を通して約束されたもので、
御子に関するものです。御子は、肉によればダビデの
子孫から生まれ、聖なる霊によれば、死者の中からの
復活によって力ある神の子と定められたのです。この
方が、私たちの主イエス・キリストです。わたし

私たちはこの方により、その御名を広めてすべての異邦人を信仰による従順へと導くために、恵みを受けて使徒とされました。この異邦人の中に、イエス・キリストのものとなるように召されたあなたがたもいるのです。——神に愛され、召されて聖なる者となったローマの人たち一同へ。私たちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように。

メッセージ

一同立つ。

古今聖歌集増補版'95 第19番（こころのとびらをひらくと）

司式者は立つ。会衆は着席する。

7 司式者 救い主イエス・キリストが教えられたように祈りましょう

一同 天におられる私たちの父よ、
み名が聖とされますように。
み国が来ますように。
みこころが天に行なわれるとおりに地にも行なわれますように。
私たちの日ごとの糧を今日もお与えください。
私たちの罪をおゆるしてください。私たちも人をゆるします。
私たちを誘惑におちいらせず、
悪からお救いください。

続いて一同次の言葉を歌いまたは唱える。

国と力と栄光は、永遠にあなたのものです。アーメン

- 8 司式者 キリストよ、あなたについてゆけますように
会 衆 イエスさま、あなたについてゆけますように
- 9 司式者 静かなところへと、あなたについてゆくことができますように
会 衆 絶望と不安の中にある人々のために祈り、かけがいのない奉仕のために、静かさの中で私たち自身を整えることができますように
- 10 司式者 とどまることのない奉仕へと、あなたについてゆくことができますように
会 衆 町のすみずみまで、人々をいやし、交わりを回復するために仕えることができますように
- 11 司式者 十字架にまで、あなたに従いゆくことができますように
会 衆 あなたの、その自己を献げる愛のうちに、私たちの希望をみいだすことができますように
- 12 司式者 暗い墓の中から出て、あなたについてゆけますように
会 衆 日々あなたの復活のいのちを分かち合い、あなたの愛の似姿として日々新たにされますように
- 13 司式者 イエスさま、あなたについてゆけますように
会 衆 あなたの世界のために、あなたの御霊に導かれ、身も心も献げて、日々新たに歩むことができますように
- 14 司式者 主は皆さんとともに
会 衆 また、あなたとともに
- 15 司式者 祈りましょう

ここで司式者は自分の言葉でお祈りをする。その後、会衆に祈ることを求めてもよい。

- 16 司式者 愛を分かちあってくださいる造り主なる神が
会衆 他の人々に対する、私たちの愛を強めてくださいますように
- 17 司式者 いのちを分かちあってくださいる子なる神が
会衆 私たちにも自分たちのいのちを分かち合うことができるよう、恵みを与えてくださいますように
- 18 司式者 私たちの内に宿られる聖霊なる神が
会衆 私たちが、いつも他の人々のために在ることができるよう、力づけてくださいますように アーメン

一同立つ。

古今聖歌集増補版'95 第41番 (ひとの知恵も、ことばもこえ)

朝の祈り (I)

聖歌

招きのことば

- 司式者 この世は主のものです
会衆 地も人々も
- 司式者 何とすばらしく、何と愛すべき
会衆 一つになって、共に生きましょう
- 司式者 愛と信仰が共にありますように
会衆 正義と平和が得られますように
- 司式者 もし、主のしもべが沈黙するならば

会衆 これらの石ころが大声で叫ぶでしょう
司式者 主よ、私たちの口を開いてください
会衆 そして、私たちの口はあなたをほめたたえます

聖書朗読

祈り

司式者 祈りましょう
神よ、私たちが苦しみ時、あなたは御心に私たちが気づくよう、虐げられた者の声を通して応え、また私たちが悪の力と戦うことができるよう、痛めつけられた人々の叫びを通して語りかけられます。どうか私たちが弱さの中でうずくまろうとしているときに、勇気をお与えください。そしてあなたに深く寄り頼むことができますように、主キリストによってお願いいたします。 **アーメン**

創り主なる神様、あなたは私たちが口にする前から、必要なものをご存知です。私たちの祈り、そして沈黙をどうぞお聞きください。私たちが求められずにいるもの、声にならない願いをもお聞きください。この祈りを私たちのイエスさまによって祈ります。 **アーメン**

主の祈り

天におられる私たちの父よ、
み名が聖とされますように。
み国が来ますように。
みこころが天に行なわれるとおりに地にも行なわれますように。
私たちの日ごとの糧を今日もお与えください。
私たちの罪をおゆるしください。私たちも人をゆるします。

私たちを誘惑におちいらせず、
悪からお救いください。

国と力と栄光は、永遠にあなたのものです。アーメン

導きのため

永遠の父なる神よ、あなたは私たちをみ力によって造り、み恵みによって救ってくださいました。どうか聖霊によって私たちを強め、導いてください。私たちが自らを献げて主に仕え、ともに主の愛のうちにこの日を過ごすことができますように、み子イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、私たちとともにありますように アーメン

朝 の 祈 り (Ⅱ)

*キリスト教一致祈禱週間の祈禱文から

賛歌「主の恵みは 朝ごとに新しい。主のまことは それほど深い」

答唱「憐れみたまえ、主よ」

先唱 神よ、あなたはイエス・キリストによって、私たちをあなたの養子となるように定められました。

しかし、私たちは告白します。互いを兄弟姉妹として受け入れることがいかに難しいかを。私たちは互いに愛と尊敬を与えることを拒み、壁や柵を作ります。あなたが、様々な私たちすべてを分け隔てなくあなたの子となさったことを、こと

ばと行いによって拒みます。私たちはあなたの晩餐やあなたの復活の日をともに祝うことができません。

答唱「憐れみたまえ、主よ」

詩編 第 33 編 16～22 節（アレルヤの答唱付き）

聖書朗読 マルコによる福音書第 10 章 46～51 節

沈黙

答唱「憐れみたまえ、主よ」

先唱 各教会のために祈りましょう。

神よ、みこころに従うことができるように私たちを助けてください。あなたに属する人々が一つになりますように。

互いに兄弟姉妹として受け入れるために、私たちの目を開いてください。私たちが腕を開いて様々な人々を抱擁することができますように。

他の教会の中にあなたの霊の働きを見るように私たちを助け、一致に向かってともに働くように駆り立ててください。世界が信じるようになり、あなたの栄光がたたえられますように。

答唱「憐れみたまえ、主よ」

特祷 顕現節第 2 主日（祈祷書 205 頁）

祝祷

賛歌 「キリストは生きている、私のうちに。」

キリストは生きている、あなたのうちに。
土の器に宝として、土の器に光として。」

就 寝 前 の 祈 り()

聖 歌 マニフィカート (賛美歌 21 177 番)

祈 り

司式者 祈りましょう

神よ、私たちが苦しむ時、あなたは御心に私たちが気づくよう、虐げられた者の声を通して応え、また私たちが悪の力と戦うことができるよう、痛めつけられた人々の叫びを通して語りかけられます。どうか私たちが弱さの中でうずくまろうとしているときに、勇気をお与えください。そしてあなたに深く寄り頼むことができますように、主キリストによってお願いいたします。アーメン

聖 書

朗読者 聖書のみ言葉を聴き、味わいましょう

ヨハネによる福音書第3章 1～6節

沈 黙

主 の 祈 り

天におられる私たちの父よ、
み名が聖とされますように。
み国が来ますように。

みこころが天に行なわれるとおりに地にも行なわれますように。
私たちの日ごとの糧を今日もお与えください。
私たちの罪をおゆるしてください。私たちも人をゆるします。
私たちを誘惑におちいらせず、
悪からお救いください。
国と力と栄光は、永遠にあなたのものです。アーメン

祈　　り

愛をもって私たちを召し出しておられる神よ、あなたは私たちの思いをはるかに超えて、この世のいたるところで働き、いと小さき者の中にみ姿をあらわされました。どうか私たちも、あなたの働きに参加させてください。教会に与えられたさまざまな恵みを整えなおし、良きパートナシップを形成することによって、あなたご自身の宣教の業に参加することができますように。僕となって生き、十字架にかけられ、そしてよみがえられた主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン

司式者　慈しみ深い全能の神が、私たちを守り、祝福を与えてくださいますように。アーメン

聖　　歌　　キリストの平和（増補版　17番）

就　　寝　　前　　の　　祈　　り（　）

聖　　歌　　すべてのひとよ（増補版　34番）

歌いながら、中央に用意されたテーブルの上のろうそくに火を灯します。

招きのことば

- 司式者 聖霊よ、おいでください
会衆 世界を新たにしてください
- 司式者 真理の霊よ、私たちを解放してください
会衆 神の子として立ち上がれますように
- 司式者 私たちの耳を開いてください
会衆 世界の嘆きを聞くことができますように
- 司式者 私たちの目を開いてください
会衆 あなたの平和と正義を見ることができますように
- 司式者 あなたの預言がもたらす勇気と信仰によって
会衆 私たちを生かしてください
- 司式者 聖霊よ、おいでください
会衆 世界を新たにしてください

聖書

- 朗読者 聖書のみ言葉を聴き、味わいましょう
マタイによる福音書第4章 12～22節

沈黙

主の祈り

- 天におられる私たちの父よ、
み名が聖とされますように。
み国が来ますように。
みこころが天に行なわれるとおりに地にも行なわれますように。
私たちの日ごとの糧を今日もお与えください。
私たちの罪をおゆるしください。私たちも人をゆるします。

私たちを誘惑におちいらせず、
悪からお救いください。

国と力と栄光は、永遠にあなたのものです。アーメン

祈り

司式者 祈りましょう

命の源、主イエス・キリストよ。主は裏切られ、十字架の苦しみを引き受け、死ぬことですべての命を回復してくださいました。主よ、あなたの愛を傷つけてしまった私たちの罪をお赦してください。傷つけられたすべての命を取り戻し、傷つける者の心の闇を照らし、すべての被造物に主にある和解と一致をお与えください。アーメン

自由な祈り

[声を出して祈りたい方は声を出して、心の中で祈りたい方はそのように]

司式者 祈りましょう

確かなみ摂理により、私たちの生きるこの世界とその生活を支えてくださる神よ、どうか夜も働く人を守り、苦しむ人を慰め、病気の人を強め、死に望む人に祝福を与えてください。そして私たちの生活が、互いの力によって担われていることを、深く心に刻むことができますように、主イエス・キリストによってお願いいたします。

アーメン

祝福

司式者 いま、生きているすべてのものに

会衆 若い人にも、年老いた人にも

司式者 近くの人にも、遠くの人にも

会衆 知っている人にも、知らない人にも
司式者 生きている人、なくなった人、そしてこれから生れてくる
人にも
会衆 すべてのものに、あなたの喜びを満たしてください
アーメン
聖 歌 わたしはなりたい（増補版 49 番）

就 寝 前 の 祈 り()

賛歌 「わたしは裸で母の胎を出た。私は裸でそこに帰ろう。
主は与え、主は取られる。
主の御名は、主に御名は、ほめたたえられよ。」

答唱 キリエ キリエ エレイソン

先唱 神よ、あなたは豊かな恵みを惜しみなく与え、天のすべての
もの、地のすべてのもの、あらゆるものをキリストのうちに
集めるために、みこころの神秘を私たちに知らせてくだ
さいました。

しかし、私たちは告白します。私たちはあなたの恵
みの豊かさとお目的を見失い、あなたの和解がすべてに及ぶ広
いものであることを忘れていました。私たちは、この世界
の希望があなたにあることを忘れていました。人々や文化を隔
て、争いをもたらす、人類全体に広がる分裂と敵意を、わた
したちも生み出しています。

答唱 キリエ キリエ エレイソン

詩編第 編 (アレルヤ答唱付き)

アレルヤ アレルヤ アレルヤ

聖書朗読 ルカによる福音書第 19 章 1～10 節

賛歌 「見よ、同朋(きょうだい)が共に座っている。

何という恵み、何という喜び。」

代禱 世界のために祈りましょう。

神よ、みこころに従うことができるように私たちを助けてください。すべてのものをキリストのうちに集めることができますように。

あなたの豊かな恵みを見るように、私たちの目を開いてください。口を開いて、世界の希望があなたにあることを告げ知らせることができますように。

様々な宗教や文化の人々が平和のうちにもともに住むことができる世界のため、豊かな者も貧しい者もその資源を分かち合う正しい世界のために働くように、私たちを助けてください。あなたの創造のたまものを責任をもって用いるように、わたしたちを助けてください。

あなたの栄光がたたえられますように。

賛歌 「主に頼る人は幸い、主に希望をおく人。」

祈り 就寝前の祈りから (祈禱書 96 頁 最初の祈り)

(祈禱書 97 頁 主日前夜の祈り)

祝祷

賛歌 「父よ、ゆだねます。わたしのすべて。父よ、ゆだねます。
あなたのみ手。」

閉 会 聖 餐 式

信徒使徒職リーダーシップ・トレーニングは、必ず主日に終了するため、参加者がみ言葉と聖餐に養われて、各々の現場に派遣されることを思い、閉会礼拝は聖餐式を行いました。

式文そのものは日本聖公会祈祷書に従い、聖餐式聖書日課も当日のものを用いています。

祈祷書のルブリックにもあるように、み言葉のところでは、沈黙の時を持つこともよい方法だと思います。

代祷の部分は、工夫する余地があるため、各々の思い・祈りを祈るということも可能です。

奉献の部分では、(信施)・供え物を献げると共に、私たちの今の思い、決意を象徴化したものを、それを説明する言葉と共に献げるという方法をとったこともあります。この場合は、司式者が聖餐式の始まる前に、参加者に意図を説明しておく必要があります。

参 考 資 料

1. 何のための教育か？
2. パウロ・フレイレの教育思想と実践から学ぶ
3. アウグスト・ボアールの民衆演劇の思想と実践から学ぶ
4. 現実社会に向き合う「教会」へ……
5. イエスは聖書のテキストといかに対話したか
～CCA（アジア・キリスト教協議会）聖書研究用テキストから～
6. 土 曜 黙 想 ～1週間の聖書の思い巡らし～

1. 何のための教育か？

池 住 義 憲

はじめに——南アフリカでの体験から

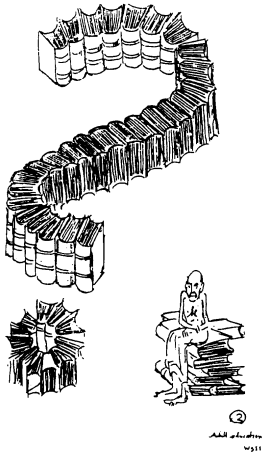
一昨年（1997年）の2月7日、友人の案内で南アフリカの首都ヨハネスブルグ郊外のタウンシップ「ソウエット」を訪ねた時のことだった。1976年、当時の白人政権によるアパルトヘイト政策に反対して起こった「ソウエット蜂起」について、車の運転手ジョンさん（黒人）に車中でいろいろ話を聞いた。

私が、「マンデラ政権以前（1994年以前）の南アフリカは一言でいうとどういう国でしたか？」と聞いた。するとジョンさんは運転しながら後部座席の私を振り返って、「それは、『悪魔』の国だった！（It was an EVIL country!）」と激しく答えた。いや、激しく叫んだ。その時のジョンさんの顔はすごかった。眉間に深いシワを寄せて「怒り」を顔一杯に表わしていた。ジョンさんはマンデラ政権後もなお、その怒りを怒りとして持ち続けている。この強い想いが南アフリカに変革をもたらしたのだと思った。怒りという変革のエネルギーを非暴力で民主的な方法で実践に移したのだ。

これはすごい。私はジョンさんの一言に圧倒された。果たして私自身は、今の日本社会の不公正、不平等、差別、抑圧などに対してどれだけ怒っているだろうか。問題を知的に理解したとしても、怒りがみえてこない。押し込められている……。

何が怒りを押し込めているのか？

インドの農村開発に取り組むNGO（非政府組織）の人が一枚の絵（次頁の絵-10）を示しながらこう話していた。「この十年間、われ



絵-10

われは農山村で識字活動を行ってきた。以前にくらべてたしかに村人の多くは読み書きできるようになった。しかし村の状況はちっとも変わっていない。いや、むしろ悪くなったんじゃないか。」

彼は繰り返し話していた。村人は確かに読み書きできるようになった。その学習過程で多くの知識や、また、社会に対する理解を深めることができた。しかし彼は何か物足りなさを感じていた。それは、識字活動をはじめた頃の村人たちの

あの新鮮な、素朴な怒りがなくなったことだ、という。はじめの頃は、村人たちは一つひとつに驚き、怒りや喜びをそのまま出し合っていた。共有し合っていた。そうすることが自分たちで自分たちの村を変えていく力になっていた。しかし、今はそれ（怒り）が後退し、押し込められてしまったのではないか、何のための教育なのか、と反省をこめて振り返っていた。

これは私にとって含蓄のある問いかけだった。日本の社会はどうか。日本社会の「教育」はどうか、教会ではどうか、と思わず私自身振り返ざるをえなかった。

笑い・喜び・怒りを変革の力にする試み——インド NGO の取り組み

インド・アンドラプラデシュ州で先住山岳民族やダリット（指定カースト）の人たちの中で活動している「農村総合開発協会（CSSS）」という非政府組織（NGO）がある。そこの所長であるラマ・ラジュさんが 1987 年に再来日した時、次のような話をしてくれた。

” タミルナドゥ州との州境いの山岳地域に住む先住民マレ・サ

ウラの人たちの部落でのことだ。その日は部落にある広場で「トラとドンキー」の劇をした。夕方、陽が沈みかけた頃に。

笛と太鼓による強烈なビートの効いた音楽に合わせてトラがドンキーを追いかける。

ドンキーは恐れおののき逃げまどう。途中でドンキーがつまずき、ひっくり返る。村人は大笑いだ。そんな楽しい時が30分ぐらい続いた。村人は大きな目で、腹をかかえて笑っていた。音楽がやみ、劇が終わって一息。皆その場に座り込む。私はトラの大きなお面を脱ぎ、村人に語りかけはじめた。

「どうだ、楽しかったか?」「そりゃ楽しかったサ」「特に何が面白かった?」「特に何が面白かったって? いや、何といってもドンキーがビクビク逃げまどって、途中ひっくり返ったことサ」。ここでまた、皆で大笑い。続いて私は村人に、「さて、この劇の中のトラは、この地域でいうと誰に相当するかナ」と聞いた。はじめは戸惑いがあったがしばらくして質問の意味を理解した村人の一人が、「トラはあの町に住んでいる大地主だ。いつも怒っている顔は、そういえばトラにそっくりだ!」と叫ぶ。これを聞いた村人は皆でやんやの喝采。

次に私は、「では、ドンキーは誰だろうか?」と聞いた。すると、村人たちは一瞬シーンと静まり返る。しばらく間を置いて村人が言った。「えっ、ドンキー?あ、あっそうか、ドンキーは俺たちだ…。」

つい先ほどまで、劇をみてその滑稽さに腹をかかえて笑っていた村人たちは、他ならぬ「自分自身」を笑っていたことに気がついた。自分たちの姿を、劇の中に客観的に見たのだ。現実の社会を「距離化（距離を置いて客観的にみる）」し、「異化（当然だと思っている

ものを異なった視点、視線でみる)」したのだ。周りの村人たちもザワザワしてきた。すると何人かが、「いや、俺たちは動物（ドンキー）じゃない。人間なんだ！」という思いからであろうか、体を震わしながら彼らの「怒り」がでてきはじめた……。

このあと、ラマ・ラジュさんたちはその場で村人たちと、村の状況、自分たちの置かれている状況・暮らし、自分たちと大地主や高利貸したちとの関係などを話し合った。そして、そうした状況を今後どのように自分たちで変えていくか、何ができるかを話し合っていた。人間としての率直な、素朴な、自然な笑いと怒り。それが出発点となって社会を変え、創っていくエネルギーに発展させていった。このプロセスこそ「教育」ではないかと思わせられたのであった。

さて、今日の日本社会の「教育」は？

「教育といえば、ただちに学校教育を意味してきた。優れた学校教育とは、いかに子どもたちの成績を上げ、レベルの高い学校に進学させたかを意味し、その競争に勝利するため、学校は子どもたちに知識を詰め込み、偏差値で管理してきた。それは、結果的に彼らの自由や創造性を奪ってきたのではないか」。これは野村 潔さん（名古屋学生青年センター前総主事）の言葉だ。里見実さん（国学院大学教授）は、今日の日本社会は「すっかり固まってしまった世界に閉じ込められている」と表現している。若者の大半は、出来上がってしまった既存の世界に順応を競うゲームとして制度化されたものになっている。学ぶという行為は、「自らの固有な時間を生きることを放棄して、自分を外部の制度に譲り渡していく行為」になってきている、という。じつに鋭い指摘だ。

さきにみたインドの NGO の取り組み・実践とは大きな違いだ。こ

うした状況のなかで、では、私たちはどのようにしたらよいか？ 教会のなかで何ができるのか？

どのようにしたらもう一つの（オルタナティブな）教育を教会の現場で実践できるのか。こうしたことを一緒に探してみたい。

2. パウロ・フレイレの教育思想と実践から学ぶ

池 住 義 憲

こうした教育方法論は、今世紀が生んだ最も重要な教育思想家といわれるパウロ・フレイレ（ブラジル）の理論と実践に基づいています。そのパウロ・フレイレを紹介しましょう。

パウロ・フレイレってどんな人？

パウロ・フレイレは、1921年、ブラジル北東部レシフェ（ペルナンブコ州の州都）で中産階級の家にも生まれました。子ども時代に飢餓を経験し、学校を一年休学します。この頃から「社会階級と知識の関係」を知るようになった、といいます。レシフェ大学法学部で哲学と言語心理学を学び、卒業後、中学校のポルトガル語教師やレシフェ大学教授などを経験します。

1950年代から60年代初頭にかけて、北東部の読み書きを知らない農民や労働者たちのなかで、識字学習を起こします。しかし、1964年3月にクーデターが起こり、逮捕され、国外追放となってしまいます。以後16年間にわたり、ボリビア、チリ、アメリカ、スイス、ギニア・ビサウ共和国などで亡命生活を送ります。この間、各国の識字キャンペーンを手伝い、『伝達か対話か？』（1968年）や『被抑圧者の教育学』（1970年）など、多くの本をポルトガル語で執筆・刊行しました。

その後、1980年6月に帰国を許され、1985年にはブラジルは民政へと移管。1989年1月からの2年半は、サン・パウロ市労働党市政のもとで教育長を務めました。各地域の学校に、父母の会、生徒会、学校評議会などの組織の創設を提案し、教育の民主化と教育の質の

転換を進めました。そして、一昨年（1997年）5月2日早朝、サン・パウロ市内病院にて逝去しました。75歳でした。

フレイレにとって「教育」とは……

フレイレは、「教育」をつぎのように言い表しています。『教育とは、未完成な人間が、未完成な世界に批判的に介在し、世界を変革することを通して自らを変革（解放）し続ける、終わりのない過程である。』

世界はいつも多くの問題を抱え、未完成・不完全です。だからこそ、私たち（私たちもまたいつも未完成、不完全な存在）がその世界に批判的に向かい合う、関わる、介在することが必要なのです。そして、未完成な世界を、すこしでも良い状態へと変革していく。それによって自らも変わり、抑圧・差別・搾取から自由になる、解放される、と考えました。人間が人間であることを取り戻すこと、それが教育であると考えました。自由な対話（「伝達」ではなく!）を用いて、結果ではなくプロセスと実践を重視し、参加者の創造性、主体性を喚起する教育を提唱しました。1950年代後半からの識字学習は、こうした考え方に立って行われました。

フレイレの識字学習はどんなもの？

では、フレイレが起こした識字運動とは、どんなものだったのでしょうか？ 具体的に、その方法を紹介しましょう。

<第1段階>

コーディネーター（または「ファシリテーター」）が民衆の中に入り、話し合うことから…

まず、コーディネーターが民衆の中に入り、30人程度の「文

化サークル」を組織します。そこで、民衆となにげない会話のやりとりをし、民衆が置かれている状況そのものを表現する民衆の言葉（民衆の生活と労働の現実と密接に結びついている言葉）や言い回しを選び出します。つまり、「民衆の言葉」が、識字学習の対象・内容となるのです。

このようにして集められた語句の中から、とくに音節が豊かで発音が比較的難しく、民衆の日常経験から切り離せない言葉を、キーワード（フレイレはこれを「生成語」と呼んだ）として抽出します。フレイレがリオ・デ・ジャネイロ州で抽出したのは、スラム、雨、鋤、土地、食物、井戸、労働、給料、職業など、17語でした。

次に、これらのキーワードが表わしている具体的な状況を、絵やスライドや写真などにコード化（コード表示）します。「スラム」についていえば、まず、民衆の生活そのものであるスラムが、絵や写真によって表現され（コード化され）ると、それは、もはや民衆が生きているスラムの現実そのものではなく、理論的な検討と批判を加えるために抽象化されたひとつの表現となります。つまり、「スラム」のコード表示は、民衆がおかれた生の現実と、それを対象化して検討する討論の場（理論的な場）とを結びつけるものなのです。

<第2段階>

そして、対話を通して民衆と協働する……

この段階でコーディネーターは、それぞれのコード表示に応じていくつかの課題を設定します。これらの課題は、コード表示を見ながら、民衆が行う討論と対話のなかで、民衆に対して提起されます。

「スラム」のコード表示の場合には、住宅、食糧、衣服、保健、

教育などの問題が論じられるべき課題として設定されます。

(都市スラムを問題にするということは、ただちに、大土地所有制に支えられた、農村における搾取と収奪を問題とすることにもつながってくる。)

そうした民衆との、および、民衆による討論と対話の後にはじめてキーワードだけが取り出され、その分解と再構成が行われます。スラム (FAVELA) の場合、FAVELA を「ファ・ベ・ラ」と音節ごとに区分し、「ファ・フェ・フィ・フォ・フ」、「ヴァ・ヴェ・ヴィ・ヴォ・ヴ」、「ラ・レ・リ・ロ・ル」と言った音素系が示されます。民衆はその中から、ファ、ヴェ、ラという音節を見つけ出し、それらを結び合わせてファヴェラ (スラム) という言葉を再構成します。

このようにして、民衆は、文字を獲得することと、現実世界を読み取ることを同時に体験するのです。既成の識字テキストではまったく問題にされなかったり、意図的に排除されてきた「現実世界の意識化」が、ここでは文字の獲得と同時に行われているのです。

最後に、先ほどの三つの音素系と一緒に記されたカードが、「発見カード」として民衆に渡されます。民衆は、これらの音素をさまざまに組み合わせながら、次々に「新しい」言葉を自分の手で生み出していきます。²

このパウロ・フレイレの教育思想と実践は、私たち教会に携わる者に対して、どのような示唆を与えているのでしょうか？三つのことについてご一緒に考えたいと思います。

² より詳細の事柄については、パウロ・フレイレ『被抑圧者の教育学』(小沢有作・楠原彰・柿沼秀雄・伊藤周訳、亜紀書房、1979年)を参照下さい。

「学ぶ」とは、社会にかかわること、社会に立ち向かうこと

まず第1に、「学ぶ」ということは、社会にかかわること、社会に立ち向かうということです。

フレイレの識字学習は、民衆が、徹底して自分たち「生の現実」を見つめることから始っています。自分たちの仕事、給料、食物、土地、住まいなど、自分たちが困っていること、怒っていること、悩んでいることに取り組むことから始まります。フレイレは、また、「コンテキスト (Context、現実の社会状況) にまさるテキスト (Text、教材) はない」と言っています。フレイレの識字学習の教材 (彼はこれを『文化ノート』と呼んだ) は、具体的な現実と結びついていました。そしてそれは、各地域毎に作られ、異なるものでした。

私たちの社会ではどうでしょうか？ 1989年にフレイレが来日した時、彼は私たちに向かって、次のように問いかけました。

” 第三世界の民衆は、(教育の機会が奪われ続けているために) 字を読むことができない人が多いが、彼(女)らは社会を読める。先進国の皆さん、あなたがたのほとんどは、たしかに字は読めるが、しかし、社会を読めますか？ 自分たちの社会で、そして世界で何が起きているか、何故そうなっているのか、読めますか？”

言い換えると、「日本の皆さん、あなたがたの教育は、社会にかかわっていますか？ 社会に立ち向かっていますか？ 教育とは、社会に介入すること、かかわることなんですヨ。社会に立ち向かうことなんですヨ。」と問いかけているように私には思えます。

フレイレは、識字とは、現実と切り離されたことを知識として習得することではなく、「他者とともに行う (現実世界の) 認識行為」

である、と言っています。含蓄のある言葉ですネ。

教会ではどうでしょう。こうした視点から、日曜学校や「聖書研究」のあり方と内容を振り返り、もう一度、構築してみたらどうでしょうか。

聞くことから始める、それは「意見表明権」を尊重することだ！

” おれたちは、一度だって、何を勉強したいかって尋ねられたことはないね。反対にいつも、何々を勉強しなきゃいけない、と聞かされてばかりだ。”

これは、ブラジルのミナス・ジェライス州の首都で開催された集会で、一人の青年が、パウロ・フレイレに語った言葉です。普通、教師は、生徒に「何を勉強したいか？」とたずねることをしない。教師が、自分の認識と関心で事前に”カリキュラム”を決定し、準備します。

パウロ・フレイレは、「生徒が学校に通い始めるとき、彼(女)らは聴くだけではなく、話すべき何かを持って」おり、教師は、「彼らもまた一個の知の担い手であること」をしっかりと認識しなければならない、と強調しています。

聴くことから始める……。そう、これは大切です。聴くということは、そのひとの「意見表明権」を尊重することです。国際子ども権利条約の第12条「子どもの意表明権」を紹介しましょう。この条約は、日本政府訳では、『児童の権利に関する条約』とよばれ、1989年11月の第44回国連総会で採択され、日本は1994年の5月になってようやく国内の法律としてこの条約を取り入れました。

ここに紹介するのは、『子どもによる、子どものための、子どもの権利条約』（小学館、1995年）からの引用です。

第一二条「ぼくらだって、いいたいことがある！」

1. 赤ちゃんのうちは無理かもしれないけれど、少し大きくなったら、自分に関係あるすべてのことについて、いろんな意見、思い、考えをもつ。それはみんな、どんどんほかの人に伝えていいんだ。国は、おとなたちがぼくらの年や成長をしっかりと考えて、きちんと受けとめるようにして欲しい。
2. だから、ぼくらは、自分に関わりがあることを、住んでいる国の法律に合うやり方で、裁判所などで何か決めるとき、言い分や意見を十分に表現して、聴いてもらえるんだ。自分で言ってもいいし、ほかの人にたのんで代わりに言ってもらってもいい。

(横浜の中学生の訳より)

国際子ども権利センター代表の浜田進士さんは、「『子どもの参加』ということは、子ども自身に関わることがらについての情報を知る権利、情報を選択する権利、そのことに関与する権利、そして、決定する権利を保証することです。」とっています。

そのためには、おとなはもっと聞き上手になり、子どもの意見表明権行使を受けとめる力量が求められています。さまざまな決定を、子どもと分かち合う勇気と寛容さを兼ね備えていきたいですネ。

「学ぶ」ことは社会を変える出発点！

最後に、こうした「学び」は、すべて、世界（社会）を変えるための出発点である、ということです。

フレイレの影響を強く受けて、ラテン・アメリカで民衆演劇運動を行っているアウグスト・ボアール（ブラジル人）は、「世界が変革

されねばならないということを知っているだけでは、十分ではない。重要なのは、それを実際に変革することだ」と言っています。

フレイレの識字学習は、民衆が置かれている具体的な状況そのものがテーマとなっています。学習者はその状況に批判的に介入・介在することによって、問題を認識し、その原因を見つけ出します。そして、その状況を変えるために、自分たちは何ができるかを、対話を通して探し出します。まさに、「学び」が、世界（社会）を変えるための「出発点」として捉えている、と私は思っています。

こうした観点から、教会での学びまたは教育（日曜学校や青年や成人を対象とした「聖書”研究”」など）を改めて位置づけ直してみたらどうでしょうか。私たちの今の社会を、神の国と義に少しでも近づけるために。言い換えれば、私たちのこの現実社会を、公正な社会へと変えていくために。

3. アウグスト・ボアールの民衆演劇の思想と実践から学ぶ

池 住 義 憲

教会での「民衆劇」（ドラマまたはドラマづくり）について考えてみましょう。まずその基盤となっているブラジルの民衆演劇実践家アウグスト・ボアールの思想と方法を紹介します。

「演劇」という言葉のイメージは？

演劇と聞くとどのようなイメージを持っているでしょうか。通常はプロがシナリオを書き、プロの俳優が見事に演じる。芸術的に。人々（観客）はそれに魅了される。この先どうなるか、ハラハラ・ドキドキして食い入るように鑑賞しつづける。そこでは劇を演ずる者と観る者（観客）ははっきりと分かれています。観客は舞台上で演じられている劇のシナリオに介入することなど勿論できません。

ブラジルの民衆演劇実践家のアウグスト・ボアールは、こうした「演じる者」と「観客」の関係は演劇の世界だけでなくこの社会全体のなかに起こっている、と指摘します。ボアールは、観客という言葉はわるい言葉だ、といます。重大な出来事が目のまえで進行しているときに、観客は行為することを禁じられた人間、事態に対処する権利をうばわれた無為な人間として、それを傍観するだけです。

たとえば今日の学校教育でいうと、教師が演者で生徒が観客。政治でいうと、政治家が演者で市民が観客。いずれも観客である生徒や市民は目の前で起こっていることを傍観するか、またはただ受け入れるだけです。ではどうしたらいいか。次の「印刷機」の話を読んでください。

「印刷機」をどうしますか？

”たとえば、ぼくが印刷機を持っているとしよう。その印刷機で、ぼくは、自分の新聞を作って広めようとはおもわない。そうではなくて、ぼくの印刷機を人々に手わたしてしまうのだ。かれらが、かれらじしんの新聞を印刷するために。”

これはボアールの言葉です。人々はいつも政府や知識階層の人たちからのメッセージを”印刷物”として受け取る側です。このようにしなさい、これはこうです、こう決まりましたなどとすべてが上から下へ一方的な情報として流されます。人々はそれに対して口をはさむことができず、介入することも勿論できません。ただ受け取るだけです。

ボアールはこう言っています。「自分たちは印刷機を使わないでこれを人々に手わたすのだ。」と。人々が自分たちの声、怒り、悩み、悲しみなどを彼（女）らの新聞として印刷するのです。私たちはそれを受け取り、それを読むことによって彼（女）らの声を聴くのだ、といます。印刷機という道具（手段または方法）を人々に手わたすことによって、人々を「観客」という状態から解放しようというのです。

ボアールはこの考え方を演劇に応用しました。演劇もまた一種の印刷機です。人々（民衆）は演劇を使って、彼（女）らの声、怒り、悩み、悲しみを表現し、私たちに語りかけます。彼（女）らの「かわら版」または「口伝えの新聞」として。私たちはその声を聞いて彼（女）らの状況を理解し、どうしたらよいかを考える出発点にしようというのです。

こうした考え方にもとづいて作られた演劇を「民衆演劇」といいます。さらにボアールは、社会のなかで抑圧されている人々の側にたって行われる民衆演劇を「被抑圧者の演劇」とも呼んでいます。

アウグスト・ボアールってどんな人？

ボアールは 1931 年にブラジルで生まれた民衆演劇の実践家です。1956 年から 71 年までサンパウロのアリーナ劇場（円形劇場）で芸術監督を務めました。しかし、1969 年の第二軍事クーデターによって弾圧され、投獄・拷問を受け、1971 年にアルゼンチンに亡命します。

その後、ラテン・アメリカ各地での民衆演劇運動や世界中で講演・ワークショップを行います。そのなかでパウロ・フレイレの識字教育にも深く関与し、その経験が以後、ボアールの演劇ワークショップのベースとなっていきました。

1978 年からはパリで「表現技術研究普及センター」の主宰として活躍します。「被抑圧者の演劇」は、抑圧が見えにくい高度産業社会のなかで新たな展開を見せました。ブラジルに戻ったボアールは、現在、リオデジャネイロに住み、ブラジル労働党の活動家として 1992 年から 96 年には市議会議員に選出され、議会活動を行います。多くの演劇関係者を市議のスタッフとしてかかえ、「被抑圧者の演劇」の方法を使って街で起きている問題を明らかにし、人々が必要とすることを次々に法制化していきました。

ボアールの「被抑圧者の演劇」は、今日、民衆および成人教育の鍵となる構成要素としてユネスコでも認知されています。³

³ ボアールについての主要参考書籍としては、『被抑圧者の演劇』（アウグスト・ボアール著、里見実・佐伯隆幸訳、晶文社、1984年）と『ラテンアメリカの新しい伝統 ——<場の文化>のために』（里見実著、晶文社、1990年）などがある。

「民衆演劇」とは？

民衆演劇とは、人々自らが主体（演者）となって演じる演劇です。自分たちの声や想いを演劇という方法で表現するのです。彼（女）らの日常生活や自分たちをとりかこんでいる社会で起こっていることを、またそこで感じている怒り、悩み、喜び、悲しみなどを身体と心を用いて演劇として表現するのです。

人々は民衆演劇を創ることを通して社会をより深く認識します。自分たちが抱えているまたは直面している問題を演劇によって他の多くの人たちに提起し、一緒に考えるきっかけとします。演劇による問題提起型教育です。

ボアールの民衆演劇の特色は多々ありますが、そのなかでもユニークで意味あるものが「参加型」という点です。人々が自分たちの状況や問題についてシナリオを書きます。それにもとづいて劇は創られ進行します。しかしどたん場にくると演者たちは演技を中断します。そして観客に何とかしてくれと頼むのです。すると観客はあれこれ提案したり文句をつけたりします。演者はそれに応じて演じる……。

このように、はじめのうちは演者と観客が分かれていたが、途中から観客が劇のシナリオに「介入」していきます。この問題をどうしたら解決できるかについて観客も参加し、一緒になって考えていきます。まさに「参加型」です。

「民衆演劇」とバイブル・シェアリング——その実践報告

ブラジルの民衆演劇実践家アウグスト・ボアールの民衆演劇を、実際にどのように私たちの教会で取り入れることができるか、その実践例を紹介します。

これは、去る 1998 年 1 月 23 日から 25 日の 3 日間、愛知県名古屋

市内の日本カトリック研修センターで開催された「信徒使徒職のためのリーダーシップ・トレーニング」（日本聖公会訓練計画委員会主催）で実践されたものです。参加者は信徒 24 名と教役者 6 名の計 30 名です。

全体は 5 つの小グループ（各グループ 6 名ずつ）に分かれます。テキストはルカ 4 章 14-21 節です。トレーニングの 2 日目の午前と午後計 6 時間をフルに使って「バイブル・シェアリング」を行いました。紙面の都合で五つのグループすべての内容は紹介できませんが、ここではそのうちの一つで「民衆演劇」を取り入れたグループの内容とプロセスを紹介します。

まずはじっくりと六人のグループメンバーで今回のテキストであるルカ 4 章 14-21 節を何回も何回も朗読および輪読します。

輪読の後にはゆっくり時間をとって各自の黙想へと移ります。沈黙のなかでみ言葉に聞き入ります。そこで感じたこと、気がついたこと、気になったことなどをメモしておきます。

そして再び小グループで集まって分かち合いです。ここで話されたことをベースにして劇を作っていきます。

今回、劇を作ることには次の三つの意味がありました。一つは、劇をつくることによって約 2000 年前に書かれた聖書（テキスト）を身体で感じることです。今の自分の状況（コンテキスト）に聖書（テキスト）をかさね合わせ、身体で表現することによって心に響いてくるものを感じ取ります。しかも他のグループメンバーとの対話と協働作のなかで。

二つ目の意味は、劇をつくる過程（プロセス）で聖書（テキスト）の言葉一つ一つに、また言葉の背後にある意味や背景にどんどん関心がでてきて、普段では見過ごしていることなど多くの気づきが得られることです。

劇をつくることよっての三番目の意味は、今回のグループでの話し合った内容を他のグループのメンバーや他人たち（たとえば友人、両親や兄弟姉妹など）と共有し、一緒に考えていくきっかけになることです。今回のこのグループでは、劇をとくに「問題提起」風つくったのはそのためでした。

さて、どのような劇ができたのでしょうか？ それは次のとおりです。

（場面Ⅰ：「2700年前…」）

預言者イザヤがゆっくりとあらわれる。

太く低い声で、「主の霊がわたしの上におられる」で始るイザヤ書 61 章 1-4 節に書かれてある箇所を「預言」として語りかける。

劇を観ているもの（観客）、その荘重さに一同シーンとなる。そして、退場。

今からさかのぼること約 2700 年、神が預言者イザヤをとおしてイスラエルの民のためだけでなくすべての人に向かって語りかけた呼びかけを体感します。それはそのまま、時間をこえて今の自分自身への呼びかけです。

（場面Ⅱ：「2000年前…」）

ナレーター的女性、あらわれる。やはりゆっくりとしたやさしい声で、救い主イエスの誕生物語を読む。そして、退場。

（場面Ⅲ：「それから 30 年後・・・」）

イエス登場。

目を輝かせてはりのある声で、イザヤ書を観客に向かって語りかけるように、呼びかけるように読む。

迫力満点の演技だ。

イエスの後ろには「主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために。」と大きく書かれた紙が掲げられてある。

そして、退場。

(場面Ⅳ：「そして 1998 年…」)

最後に、1998 年 1 月 25 日、いまここにいる私たちの仲間の一人であるメンバーが同じイザヤ書を読む。

ゆっくりと、考えながら。

分りにくい個所にひっかかりながら……。

何かブツブツと日常生活のことと照らし合わせながら読む。

そして、劇に引き込まれるように観ている私たち（観客だと思っていた私たち）に、その人はやさしい声で「あなたはどう思いますか？ これ、どう感じますか？」と語りかける…。

劇はこれで終わりです。わずか 5 分の劇でした。場面Ⅳの最後になされた観客への語りかけ、呼びかけがきっかけとなって、今度は全体での分かち合いへとつながっていきます。目の前で観ていた劇は、それが進行するにつれて「いまここ」に生かされている自分自身の生き方、在り方へとそのままつながってきました。2700 年前の時代、2000 年前の時代、そして 1999 年の現在、その現在を生きる私たちに何ができるのか、イエスの生き方に学んでその働き人としてこれからどう生きるか…。

アウグスト・ボアールの「民衆演劇」からヒントを得て実践・導入した劇づくりでしたが、時代を越えてみ言葉を「体験・体感」することができたバイブル・シェアリングでした。いかがだったでしょうか。

ブラジル社会で実践されたアウグスト・ボアールの民衆演劇の一例

ここではすこし趣きをかえて、ボアールの民衆演劇のなかでもユニークな「見えない演劇」というものを紹介しましょう。

ラテン・アメリカの民衆芸術運動家アウグスト・ボアールの「民衆演劇」にはいろいろなものがあります。観客が舞台に介入してその場でシナリオを作って演ずる「同時進行劇」、観客が自分の意見や想いを他人の身体をつかって彫刻として表現する「彫刻演劇」、観客が劇のシナリオと劇のなかの行為に全面的に参加し、討論しながら劇（シナリオ）を変え、創っていく「討論劇（テアトロ・フォーラム）」、新聞のニュースをそのまま舞台にかける「新聞演劇」などなど……。

そのなかでもユニークなのが「見えない演劇」と呼ばれるものです。

この「見えない演劇」が実際にブラジル社会を変えるための教育方法として実践されている具体例を紹介します。

教会とは直接関係がないかもしれませんが、このようなこともあることを私は皆さんと共有したいので、以下、紹介します。地球の反対側のブラジル社会の理解を深めることにもなります。

「身売りする黒人」

” 場所は、ブラジルのリオ・デ・ジャネイロ市内広場。一人の黒人が、「私を買ってください！」と書いてあるカードを首から下げて、大声で叫んでいます。「私を買ってください！私を買ってください！」「仕事もない。お金もない。着るもの、食べるもの、住むところ、すべてない。これじゃあ、昔の奴隷時代のほうがましだ！私を買ってください！」”

これは、「見えない演劇」の初めの部分です。

「見えない演劇」とは劇場で行われる演劇ではなく、自分たちが演劇の観衆であることを知らない観衆の前で行う演劇のことです。この場合の観客とは、リオ・デ・ジャネイロ市内の広場にいる、または通りかかる人たちのことです。民衆の解放と社会変革のための効果的な「武器」または教育方法として実践されている演劇です。

劇の背景にあるブラジルの社会状況

この劇の背景にあるものは何なのでしょう。

現在、ブラジルの国内総生産（GDP）は世界でも第10位の規模となっています。豊富な天然資源と広大な国土をもち、ラテン・アメリカのNIES（新興工業経済地域）と呼ばれて、その経済開発力は目覚ましいもののようにみえます。

1990年に市場開放政策を受け入れ、輸出代替工業化路線へと転換し、世界の新しい生産様式、競争状態のなかに参入しました。輸入を自由化し、外資を引きつけるために年利25%の金利も設定したりしました。

1994年7月には、当時のカルドーソ蔵相（現大統領）によって新通貨レアルの導入（レアル・プラン）など、新しい経済政策を採用しました。豊富な外貨準備高を裏づけに、1ドル＝1レアルという為替相場に固定・保証し、通貨の信用回復につとめました。物価と賃金を凍結し、経済の安定化をめざしたのです。発電や鉱山開発、通信などの国営企業の民営化をテコに、海外からの多額の直接投資を呼び込みました。

ブラジル経済を力強い回復軌道に乗せたもう一つの大きな要因があります。メルコスル（南米共同市場）と呼ばれるものです。ブラジル、アルゼンチン、ウルグアイ、パラグアイの四カ国が加盟して

1995年1月に発足しました。域内の関税撤廃や労働市場の自由化を目指してそのために商法や税制などを調整するもので、米国、カナダ、メキシコ三カ国による北米自由貿易協定（NAFTA）の南米版と言われています。これが外国企業の直接投資ブームの「呼び水」になりました。

こうした外資導入や、メルコスルを核に成長路線を歩みだしたブラジル経済ですが、自由化や国際社会との相互依存の深まりを通じて、市場経済の荒波を強く受けています。たとえば、ブラジルの伝統あるサンダル産業が安い中国製品に押されて壊滅しました。

まだあります。インフレの鎮静化、民営化による直接投資の拡大という経済指標の上では順風満帆にみえたブラジル経済ですが、市民は我慢を強いられています。もともと低収入の上に給与の据え置きが続く公務員や労働者。そのなかで、とくに警察官の全国的なストライキはついに軍隊と衝突する事態にまで発展しました。経済的繁栄の陰で、国内における地域間、社会階層間の膨大な格差が大きな問題となっているのです。

問題提起としての「見えない演劇」

冒頭の「身売りする黒人」という見えない演劇は、そうした経済優先社会に対しての鋭い問題提起です。自分たちの社会で今一体何が起きているのか、その結果誰にもっとも困難が降りかかっているのかなどの問題を一般市民に提起しています。そして、これらの問題を一緒に考え、取り組んでいく「場」を創り出しているのです。

演劇はさらに、次のように進行していきます。

” 叫んでいる黒人をみて数人の奥さんたち（役者）が恥ずかしそうにしている。すると、ひとりの金持ちの奥さん（役者）

がその黒人をお金で買う。それを見ていた他の奥さんたち（こちらにも役者）のひんしゆくをかう。なにか不穏な雰囲気になり、言い合いになる。”

劇はこのあと、自分たちが演劇の観衆であることを知らない観衆たちの応答、関わり（無関心という関わりも含めて）によって、演劇ではあるのですが、現実はこの広場で起こっていることとして「観衆」を巻き込み、「シナリオ」は作られていきます。

いや、正確には、現実社会の問題理解とそれへの介入（問題解決への一歩）が起こるのです。この「見えない演劇」は一昨年（1997年）から今年にかけて何回も繰り返し行われたものです。⁴

最後にボアールの言葉を……

ボアールは、「世界が変革されねはならないということを知っているだけでは十分ではない。重要なことは、それを実際に変革することだ。そのことに『被抑圧者の演劇』の諸技術もまた役立つことができる」とのべています。

彼にとって演劇は、まさに社会をすこしでも良い方向へと変えていく「道具」なのです。私たちもこうした視点から、もう一度、私たち日本社会の教育をとらえなおして見る必要があるかと思えます。本稿第一項で述べた「何のための教育か？」に私も立ち戻って、教会での教育を、開発教育を、人権教育を、そしてさらに重要なことは学校教育を見直していきたいと思う。

⁴ これは、筆者が昨年（1998年）3月中旬、リオ・デ・ジャネイロ市の「抑圧者の演劇センター」（Centro de Teatro do Oprimido）を訪問した時に、同センタースタッフから聞いたものです。

4. 現実社会に向き合う「教会」へ……

池 住 義 憲

最後に、今までのまとめの意味も含めて、「現実社会に向き合うワークショップ」を紹介します。

「社会に向き合うワークショップ」！

これは、米国・ニューヨーク在住の作家ジョナサン・シェルさんが昨年（1998年）春頃に出版した『時代の贈り物ー核兵器廃絶を今こそ』（The Gift of Time The Case for Abolishing Nuclear Weapons Now）という本からヒントを得たものです。この本は彼自らがパトラー元将軍やパグウワッシュ会議のロートブラット会長、マクナマラ元米国防長官らとインタビューし、それをまとめたものです。米国で大きな反響を呼んだものです。

シェルさんは、核兵器廃絶を米国史上の奴隷制度廃止になぞらえて、現在では奴隷制を擁護する人がいないように、核兵器についても人々の考えを道義的にも理性的にも変えることができ、必ず廃絶することができる、と強調しています。

約一世紀前までは、ほとんどの人々は奴隷制を道徳的に問題ないと受け入れていました。さらに、いったん根づいた制度を廃止するのは不可能であると信じていました。しかし、現実には人々は、奴隷制を容認できないとただけでなく、それを廃止したのです。以前は奴隷制を廃止することは考えられなかったが、今では奴隷制そのものが考えられないものになっているのではないかとシェルさんは言っています。

さて、これをどのようにワークショップで活かすことができるの

でしょうか。やり方は以下の通りです。

ステップ I

5～7人位の小グループをつくります。各グループに模造紙1枚とマジックを一人1本ずつ配ります。その紙に、「この社会から取り去りたいもの、なくしたいもの、廃絶したいもの」をグループで自由に出し合い、それを書いていきます。どんなことでもいいのです。ブレイン・ストーミングで、思いついたら何でも書いていきます。時間もたっぷりとって。

たとえば、戦争、貧困、飢餓、テロ、差別、汚職、いじめ、暴力、地雷、核兵器、米軍基地、偏差値、管理教育、テスト、死刑制度、環境破壊、ダイオキシン、自殺、エイズ、セクハラ、痴漢、児童虐待、売買春、原発、段差、天皇制、ミスコンテスト、万博、戸籍制度などなど…。いくらでもでてくるでしょう。ある程度の時間が経ったら、グループ毎に書き出したものを全体で共有します。

このプロセスは、私たちが現実社会に立ち向かう（向き合う）機会・「場」を与えてくれます。自分の身の回りから地域社会・国・アジア・世界へと幅広く、奥深く隅々まで見渡すことを可能にしてくれます。

「日常」から離れて、ワークショップといういわば「非日常・脱日常」の場にたって、ここから自分が生きている現実社会を振り返るのです。日常では当然または”常識”と思われていることを、聖書の視点から見直すのです。イエスから遣わされたこの世の働き人として、具体的にこの現実社会で行動（Action）を起こしていくために。しかも、自分とは異なる考え方、経験、価値観を持っている人たちとの「出会い」と「対話」を通して。

これだけでも大きな意味があります。しかし、ワークショップはまだ続きます。

先へ進みましょう。

ステップⅡ

「この社会から取り去りたいもの、なくしたいもの、廃絶したいもの」として書き出したもののうち、各グループ毎で話し合って「私たち教会が何らかのかたちで取り組み、除去および廃絶に関われる」と思われる問題・課題を丸で囲みます。

このプロセスでは、現実社会にある問題に対して私たちの教会の姿勢（スタンス）を一緒に創っていく機会となります。社会に向き合い、社会を良い方向へと変えていく（Transformation）ための出発点です。不公正な不平等なこの現実社会を、公正で平等な社会へと変えていく出発点です。できるところから。「変える」ということは「未来にかかわること」です。

現実的に具体的にどのようにしたらよいか、について話し合うことができればもっといいでしょう。活気にあふれたグループ対話になることでしょう。

ステップⅢ

各グループで書き出したすべてのもののうち、「難しくても、時間がかかっても、私たち皆が力をあわせれば、なくすことができる、取り去ることができる、廃絶することができると思うもの」をX印で消していきます。

さて何が残るか……。どれくらいのものが残るか……。

ステップⅣ

ジョナサン・シエルの『時代の贈り物ー核兵器廃絶を今こそ』を紹介・共有します。「変化は可能だ！」(Change is possible!)というメッセージをこめて。そして、もう一度各グループで「なくすことができる、取り去ることができる、廃絶することができると思うもの」がないかどうか検討し、あればX印で消していきます。

最後この作業全体を振り返って感じたこと、気づいたこと、発見・発掘したことをグループで自由に話し合い、共有します。

このプロセスでは、現実社会に向き合っている自分のこれからの生きる姿勢を考える場となります。また、私たちの教会の在り方と社会のなかでの役割・使命(ミッション)を考える場となります。問題・課題の解説家になるのではありません。困難であっても、時間がかかっても、今私たちが生きているこの時代は、50年後、100年後の時代に人たちにどのような「贈り物」をするのか、を一緒に考えるのです。そのための力と勇氣、エネルギーを互いに創り出すのです。ワークショップとは、対話を通したそのような協働作業の場であるのですから。

最 後 に……

社会に向き合うワークショップ、如何だったでしょうか。一度試してみてください。現実社会に向き合う教会づくりへ向けて…。

最後に、私からの皆さんへの短い三つのメッセージです。

- (1) 教会での教育は相互に学び合い、相互に強め合う (Mutual Empowerment) 場。一方(教師または牧師)が一方(生徒または信徒)を導く、教えるというのではありません。すべての人は豊かな、しかも異なった知識、経験、技術、アイデア、パワーを持っています。教師・牧師はそれを引き出すファシリテーター

ターです。そんな教会での教育を創ろうではありませんか。

(2) 教会での教育は皆で何かを創り上げる「協働作業の場」。

現実社会にある問題・課題を知り、理解することだけにとどまりません。それらに対して私たちはどうするか、どう立ち向かうか、どう取り組んでいくかという問題解決のための具体的方策を皆で協働して創り出していくのです。つい先程（つい2000年程前）、イエスが私たちに示したように。

(3) 最後の最後にもう一度パウロ・フレイレの言葉を皆さんと読んで拙文を終わります。

「教育とは、未完成な人間が未完成な世界に立ち向かい、世界を変革することを通して自らを変革（解放）する終わりのない過程である。」

5. イエスは聖書のテキストといかに対話したか

～CCA（アジア・キリスト教協議会）聖書研究用テキストから～

<Reading The Bible With New Eyes>

(1996, Mission and Evangelism & Education Desks, CCA)

西原 廉太

はじめに

イエスの聖書の用い方が、当時一般的であったユダヤ教指導者のそれといかに異なるかに注目したい。ここで、一つのエピソードを取り上げ、さらに立ち入って研究する。このエクササイズによって、そこには描かれていない不明な部分を私たちのイマジネーションで埋めることがいかに重要かが明らかになるであろう。このエクササイズはまた、同時に、私たちの過度な期待や思い込みがいかに私たちを神の真理から遠ざけるかを明らかにするであろう。最も重要なことは、「テキストとの対話」の必要性を明らかにすることである。では、実際に、ルカ 4:16-30、イザヤ 61:1-5 を読んで見よう。

ルカによる福音書第4章16-30節

16 イエスはお育ちになったナザレに来て、いつものとおり安息日に会堂に入り、聖書を朗読しようとしてお立ちになった。17 預言者イザヤの巻物が渡され、お開きになると、次のように書いてある個所が目にとまった。

18 「主の霊がわたしの上におられる。

貧しい人に福音を告げ知らせるために、

主がわたしに油を注がれたからである。

主がわたしを遣わされたのは、

捕らわれている人に解放を、
目の見えない人に視力の回復を告げ、
圧迫されている人を自由にし、

19 主の恵みの年を告げるためである。」

20 イエスは巻物を巻き、係の者に返して席に座られた。会堂にいるすべての人の目がイエスに注がれていた。21 そこでイエスは、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と話し始められた。22 皆はイエスをほめ、その口から出る恵み深い言葉に驚いて言った。「この人はヨセフの子ではないか。」23 イエスは言われた。「きっと、あなたがたは、『医者よ、自分自身を治せ』ということわざを引いて、『カファルナウムでいろいろなことをしたと聞いたが、郷里のここでもしてくれ』と言うにちがいない。」24 そして、言われた。「はっきり言うておく。預言者は、自分の故郷では歓迎されないものだ。25 確かに言うておく。エリヤの時代に三年六か月の間、雨が降らず、その地方一帯に大飢饉が起こったとき、イスラエルには多くのやもめがいたが、26 エリヤはその中のだれのもとにも遣わされないで、シドン地方のサレプタのやもめのもとにだけ遣わされた。27 また、預言者エリシャの時代に、イスラエルにはらい病を患っている人が多くいたが、シリア人ナアマンのほかはだれも清くされなかった。」28 これを聞いた会堂内の人々は皆憤慨し、29 総立ちになって、イエスを町の外へ追い出し、町が建っている山の崖まで連れて行き、突き落とそうとした。30 しかし、イエスは人々の間を通り抜けて立ち去られた。

イザヤ書第 61 章 1-5 節

1 主はわたしに油を注ぎ
主なる神の霊がわたしをとらえた。

わたしを遣わして
貧しい人に良い知らせを伝えさせるために。
打ち砕かれた心を包み
捕らわれ人には自由を
つながれている人には解放を告知させるために。

2 主が恵みをお与えになる年

私たちの神が報復される日を告知して
嘆いている人々を慰め

3 シオンのゆえに嘆いている人々に

灰に代えて冠をかぶらせ
嘆きに代えて喜びの香油を
暗い心に代えて賛美の衣をまとわせるために。
彼らは主が輝きを現すために植えられた
正義の櫟の木と呼ばれる。

4 彼らはとこしえの廃虚を建て直し

古い荒廢の跡を興す。廢虚の町々、代々の荒廢の跡を新しくする。

5 他国の人々が立ってあなたたちのために羊を飼い

異邦の人々があなたたちの畑を耕し
ぶどう畑の手入れをする。

いくつかの問い

- (1) ナザレの人々が最初イエスに対して好意的な印象を持ったのは何故か。(22 節参照)
- (2) イエスご自身から議論を始められた理由をどう考えるか。最初は彼は良く受けとめられていたが、今や、突然に雰囲気は変わる。(23 節、24 節参照)
起こったことすべてがこの物語の中に語られているわけで

はないことを想起する必要がある。それゆえ、聖書を調べ、当時の信仰や民衆の期待を知り、さらに私たちのイマジネーションを駆使することによってより良い推測ができるであろう。

イザヤ 61:4, 5 を読み、そして、ルカ 4:18 以下で、ルカがどのように引用しているかを比較してみよう。ルカはある部分を省いている。さらに、もう一度イザヤ 61:4, 5 を読んでみよう。イエスは、異国の人々がユダヤ人の奴隷になる日が実現しつつあると言おうとしたのであろうか。もしくは、そのような期待は正しくないと教えようとしたのであろうか。もし后者ならば、唯一選ばれた民と教えられてきたユダヤ人はどのように感じたのであろうか。

- (3) 25 節から 27 節について、この箇所は、神について何と言っているであろうか。(非ユダヤ人に対する神の態度について)。
- (4) 以下の聖書箇所も参照し、私たちの主は他の信仰を持つ人々や他の国籍を持つ人々をどのように見ていたかを考えよう。

マタイ 8:1-13, ルカ 10:25-37, ルカ 17:11-19,

- (5) イエスは、ユダヤ人だけではなく、世界中のすべての抑圧された民が神の約束を受け継ぐと言っておられるのであろうか。
- (6) イエスの視点は、当時の他の人々のものとは明確に異なっていた。イエスも他のユダヤの子供たちと同じように成長し、聖書の読み方も皆と同じように親や長老たちから学んだはずなのに、どうしてこのような違いが生れたのであろうか。
- (7) イエスが、エリヤがサレプタのやもめのもとだけに遣わされた物語(列王記上 17:8-15)を読んだ時に、イエスにとって印象深かったことは、異国の貧しきやもめが神のパートナーとして選ばれたことであった。壺の粉や瓶の油の奇跡にはイ

エスは強調点を置いていない。預言者に対する神の特別な配慮にも強調点を置いていない。あなたならこの聖書の箇所の中の部分に強い印象を受けたであろうか。

聖書を読む際のいくつかのヒントとサジェスション

聖書テキストと対話することは、私たちにとって難しいことである。しかし、イエスはまさに聖書と対話していた。聖書と対話する上での、いくつかの簡単なヒントを挙げてみる。

<ヒント1> 神の御言葉を理解するためには、神そのものを知ろうとしなければならない。

私たちは常に、神について私たちがどのような一般的前提を持っているかを問うべき。もし私たちが、神は「信徒」のみを愛していると考えているなら、私たちはナザレの会堂の会衆と同じグループに属する者となる。神は、思いもかけない場で、思いもかけない人の顔を持って現れられたのである！。エレミヤ書 22:16、ミカ書 6:6-8…その他無数の箇所では、神は教理よりも正義に非常なる関心を有している。それ故、まず最初に求められることは、神を知ることである。あらゆる者を愛される神を知ることである。その神は、宗教や、社会的ステータスに関係なくすべての人々を私たちが愛するように求められているのである。

<ヒント2> イマジネーションによる再構成

十分に詳細なことは与えられていない、ということに留意しながら聖書の物語を読むべきである。そもそも聖書は、その場面に身近

であった人々、細かい所は容易に埋めることのできた人々に対して書かれたものだからである。詳細を埋めるために、私たちはまた、新約聖書における旧約聖書からの引用を、旧約原典と比較する必要もある。その違いに注目し、違いを理解するようにすることは大切である。

＜ヒント3＞ 聖書研究のためのツールを用いる

コメンタリー（註解書）、聖書辞典。一つの主題についてできるだけ多くの並行箇所を集めたコンコルダンス（聖書語句辞典）は有益である。

＜ヒント4＞ 相違や矛盾を予期する

仮に、十戒の間に矛盾を見出したとしても、狼狽することはない。矛盾や相違は時に私たちの理解を豊かにする。しばしば、相違はまた、著者の人間的弱さからも起こり得る。しかし、私たちが互いの声を聴くようにと神は招いておられるのであり、そのことによってバランスが取られ、確かなものとされて行くのである。私たちは、理解するための苦闘を経験することによって、神の知の中で成長するのである。

＜ヒント5＞ 神の国の視座を発展させる

常に、私たちは自らの過度な期待や思い込みを自省するべきである。私たちが誤った、利己的な希望の中に陥る時、私たちは聖書を誤読するのである。

<ヒント6> 奇跡の向こう側にある真の意味

私たちは、奇跡物語の向こう側にある真のメッセージを読み取るべきである。奇跡は神のサインなのである。

6. 土 曜 黙 想

～1週間の聖書の思い巡らし～

西 原 廉 太

聖書の黙想には、時間が与えられれば与えられるほど豊かな気づきと賜物がもたらされます。しかし、普段の聖書研究等ではどうしても時間に制約があります。そこでこのプログラムは、1週間全部を黙想の時にしてしまうというものです。とは言っても7日間泊まりがけで行うわけではありません。例えば、次のような方法が考えられるでしょう。

1. 土曜日夕の礼拝から

毎週土曜の夕刻に集まり、礼拝を献げます。夕の礼拝を行っている教会はもちろんそれに参加し、あるいは単純素朴な祈りと黙想の集いでも良いでしょう。その礼拝の中で拝読されるみ言葉の一部をとりあげて、それについて適当な方（牧師でも信徒でも）が短い黙想への促しをしていただきます。そのみ言葉について、参加者はしばらくの時間（5分～10分位）黙想します。そして祈りが終われば、その日はそれで終了。

しかし黙想自体はこれが始まりとなります。参加者は、そのみ言葉をその後1週間、毎日どんな時でも心のどこかに留めておくように努力するのです。ごはんを食べる時、仕事をしている時、休んでいる時、就寝前の一時、いつでもそのみ言葉を思い出して、思いを巡らせます。そして何か気づいたこと、思いついたようなことがあれば簡単にメモをしておきます。

そしてまた、次の土曜日を迎えます。礼拝の前に1時間程度時間

をとって、その1週間の間、各自が思い巡らしたことを分かち合うのです。その分かち合いは、み言葉と参加者それぞれの「日常」や「生活」が共鳴しあった豊かなものとなるに違いありません。参加者は引き続いて行われる祈りの中で、また次の1週の黙想のみ言葉を与えられ、そのみ言葉を思い巡らせつつ、1週間を過ごします。

2. 主日礼拝に引続いて

主日の聖餐式（礼拝）後に次主日の福音書を皆で読んだり、確認するなどして、1週間その福音書を黙想し、次主日に備えるというのも可能でしょう。そうすれば説教もより積極的に聴くことができるのではないでしょう。

とにかく、それぞれの教会や会衆の条件に合わせて、さまざまな形が考えられると思います。一度試してみられてはいかがでしょうか。

あとがき

1995年から始まった「信徒使徒職のためのリーダーズ・トレーニング」は、2000年1月に開催された第4期第2回のトレーニングで、9教区から計75名の参加者を得たことになる。

はじめにも記したが、このブックレット出版の経緯は、各教区に信徒使徒職を担う方々が生まれ、それらの人々の働きの上に少しでもお役に立てばという、私たち委員のささやかな願いからであった。150頁ちかいものとなってしまったが、「変化は可能だ」という希望をいただくすべての人々とともに、神の宣教に参加させていただく一助になればと願っている。

最後に、ファシリテーターとして最初から参加し、多くの資料を提供してくださった池住 義憲さん、西原 廉太司祭、原稿転載をお認めくださった聖公会新聞、そして75名の参加者の皆さんお一人おひとりに感謝したい。

救主降生 2000年4月23日（復活日）

日本聖公会訓練計画委員会

信徒使徒職ブックレット

わたしの物語を分かちあうために

あなたにもできるイエスさまのお手伝い

2000年5月20日 発行 定価 500円

編者 日本聖公会訓練計画委員会

発行所 日本聖公会管区事務所

〒162-0805 東京都新宿区矢来町 65

Tel. 03-5228-3171

日本聖公会管区事務所